

月刊  
オパーリン王国  
2012年  
5・6月合併号



オパーリン

## 序文

---

さーて、さてさて、遅れに遅れてしましまして、遂に月刊という約束を果たすこともできず、5・6月合併号として本号をお届けする次第と相成りました。これでは月刊ではなく、隔月刊ですね。となると、今まで使っていた「月オパ」という略称もそのまま使うには違和感が生じてくる。かといって、「隔月オパ」なんていうのもなんかしっくりきませんね。ま、しっかり毎月作りなさいということでしょう。申し訳ありませんでした。

近況報告といたしましては、詳しくは「オパーリンーケ月」のコーナーに記載してありますがね、就職活動、長引いておりますよ。河出書房新社という素晴らしい本を沢山出している出版社の選考が最終面接まで進んだんですが、失格。地味にショックでしたね。それを期にマスコミ関連企業を受験するのは辞めにしまして、今はまあ出来る限り「暇で楽な」仕事を探して頑張っております。忙しいと月オパ出せなくなっちゃうからね。

次に、今月の記事のラインナップを少し紹介しましょうか。先月号に予告していた書き換え文学賞企画、「このままじゃ終われない文学賞」の第一回が無事掲載となりました。この企画は、パブーの作家さん達にご協力いただいた企画で、本号の発効日が遅れてしまって、多大なるご迷惑をかけてしまい申し訳ありませんでした。記念すべき第一回はおそらくは日本一くらいに有名な、あの作家の小説を書き換えたので、原作を知っている人は楽しめるんじゃないかと思えますね。原作を知らない人は、本屋さんで買って読んでみてくださいな。そうした方が楽しめると思いますよ。

あと、個人的に一押しなのが「ルポ」の虫食った記事。苦しんだからね、その分読み甲斐のある記事になったんじゃないかと自負しておる次第であります。

それとねえ、これを読んでいる人がどこの部分を読んでいるのか分からないんだけど、個人的に「読んで欲しいな」と思っているのは「読了リスト、感想文」のところかな。意外に読み飛ばしがちだと思うんだよね。いやね、僕の感想自体は全然読み飛ばしてもらって構わないのさ。重要なのはそのラインナップね、タイトルぐらいは頭の片隅にとどめてもらって、今度本屋さんに行く時に、少しでも参考になればな、と思うわけです。「くそ」って書いた本意外はどれも自信を持ってお勧めできるものだから。

とまあ、こんな感じかな。でもまあ、あくまで自由なんだよ、読み方なんて。最悪一文字も読まずにゴミ箱にポイしても、本はそれを甘んじて受ける、そういう存在なんだよ。健気だね、本は。

それでは、本号をご自由にお楽しみください。

(2012年6月15日)

## 第三回 「その「声」は「誰」の声？」 東町健太 オパーリン

---

第三回「その「声」は「誰」の声？」

執筆者 東町健太、オパーリン

### ・企画趣旨

とある大新聞に日がな寄せられる読者の「声」。その声は一体誰の声なのか？何を代弁しているのか？国民、労働者、女性、弱者、子供、はたまた単に「我々」という曖昧な共同体意識か？気になって読んでみれば、これまたびっくり、とんでもない・・・、いやいや思わず溜息がこぼれるほどのすばらしき投稿ばかり。

ということで我々オパーリン王国では東町健太氏を委員長にすえ、「『その「声」は「誰」の声？』委員会」を結成した。当委員会では毎月、これらの投稿の中から特に秀でた投稿について勝手に表彰し、講評を行うこととする。

### ・『その「声」は「誰」の声？』委員会 メンバー紹介

選考委員長 東町健太

選考副委員長 オパーリン

### ・2012年5月度 結果発表

〈大賞〉

「早朝の町内回りでカラス撃退」

(無職 男性 64才)

日の出の早い季節になり、早朝からカラスの鳴き声で起こされる方が多いのではないのでしょうか。カラスも産卵、繁殖の季節で街に繰り出すことが多くなりそうです。私の住む町ではゴミ収集の有料化と各戸収集が成功して、しばらくカラスの被害は忘れておりましたが、最近になり復活してきました。

そこで私は一念発起してカラスの第一声とともに起きて、町内を一周して深夜に出されたゴミを一カ所に集めてブルーシートなどで覆うなどの対策を講じ、マンションなどにもブルーシートなどで見えなくするように依頼しました。これを三日間続けたところ、カラスも他に行ってしまいました。行政に働きかけなくても、地域にそのような意識の人がいれば、悪賢いカラスにも勝利できます。

〈講評〉

#### ・東町健太（選考委員長）

もう何年前になろうか、確か世田谷のあたりだった気がしたが、そこにはオウム真理教の施設があった。住民たちはこの施設に対して退去を要求、途中いろいろなことがあったが、オウム施設は無事に他の場所に行った。行政に頼ることなく、住民たちは自らの力でオウム施設を退去させたのだ。すばらしいことである。自分たちにとって目ざわりなものは当然どこか他へどこかすべきだし、臭いものにはふたをしなければならないのだ。筆者の町のカラスがいなくなってさぞ筆者は喜んだことであろう。カラスが他所へ行ったことへのお祝いのような意味も込めて、今月の大賞とさせていただきます。心からおめでとう、と言いたい。

ちなみに余談だが、世田谷から追い出されたオウムは私の家の目と鼻の先に新たに施設をつくった。悲しい。

#### ・オパーリン（選考副委員長）

中学生の頃、社会の授業で「何かテーマを決めてレポートを書く」という授業があった。毎学期一本のレポートの提出が義務付けられていて、分量としては400字詰め原稿用紙3枚以上とか、そんなもんだったと思う。僕はその授業で「都心部におけるカラス被害」について調べてレポートを書いた記憶がある。

カラスに限らず、猿だとかネズミだとかゴキブリだとか、何でもいいけどさ、野生動物による「被害」はよくニュースでも取り上げられる。彼らは「被害」って当然のように言うけどもさ、奴らからしてみれば人間による「被害」なわけで、「カラス＝悪」と決め付けて何の疑問も感じない人間の神経が私には理解できない。「もののけ姫」を見たことがないとは思えない。

本コーナー（「その「声」は「誰」の声？」）の選考を担当し始めてからというもの、常々思うのだが、本コーナーで表彰された作家の方達は真の天才である。彼らには「迷い」が無い。一切無い。自分の考えを信じて疑わない。常に迷っている僕のような人間には、彼らはとても眩しい。眩しすぎる。眼がチカチカする。うっとおしい…、おっと、ここまで。よく「キチガイと天才は紙一重」などと言ったりするが、彼らは間違いなくキチガ…、おっと、ではなく天才である。

筆者もその錚々たる天才の面子の中の一人であることに一点の疑いもあるまい。私も筆者のみなざる正義感に習い、追い出されたカラスは一体どこに行き着くのだろうか…、などと気になってしまっているうちはまだ半人前だと肝に銘じなければ。

〈佳作〉

「若者自殺対策に本腰入れよ」

（無職 男性 62才）

内閣府の意識調査によると「本気で自殺したいと思ったことがある」という人は23.4%に上がり、前回（2008年）調査より4.3%増加した。ショックを感じるのは、年齢別で見ると20台では28.4%に上がり、実際に自殺者が多い40～50台よりも高い事実が明らかになったことだ。

私の知り合いにも、大手コピー機メーカーに入社しながら、自ら命を絶った若者がいる。動機は明らかではない。だが彼は期間契約社員で、正社員との格差を感じていたようだ。まじめに働いていても将来に希望が持てない状況に失望したのではないか。

内閣府は調査だけでなく、若者の自殺対策に本腰を入れてほしい。まじめに働いていれば、結婚ができ、小さなマイホームくらいもてる社会にすべきだ。それには正社員の増加と終身雇用制が不可欠だ。わかものこそが、社会や経済全体に希望をもたらす原動力になると信じる。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

この文書で筆者が批判しているのは「死に様」という考え方をわたしたち現代人がいつのまにかどこかへ忘れてきてしまった点だ。日本人というのは古来よりその死に様を重要視した。主君への忠義のために、親への孝のために、そして仁義のために日本人は命を懸けてきた。しかし現代人の死に方はどうか。自殺する若者も、「結婚ができマイホームくらいもてる」ようになればどうせ自殺する人間なんかなくなるだろう、とうそぶく筆者のシニカルな皮肉に自分の生き方を考えさせられた。おそらくはたいしてよく知りもしないであろう「知り合い」の自殺の動機も、「正社員との格差」のようにつまらないものだろうと推測する筆者の文章には一種の諦観さえただよう。仕事さえあれば、「将来に希望がある」などと短絡的に考えてしまうようなおろかな人間が増えてしまったこの国を憂う筆者の文章は悲しみに満ちている。

・オパーリン（選考副委員長）

「化石」というものは過去の時代の有り様を知るための貴重な資料である。かつて、この国には「まじめに働いて、結婚ができ、小さなマイホームくらいもてる」こと「だけ」が人間の幸せだ、と考え、それ以外の一切の価値観を排除するような風潮があったのかもしれない、と筆者の文章は教えてくれる。

その歴史的資料としての重要性を鑑みて佳作に推す。

〈佳作〉

「竜巻被害にカンパを募ろう」

(介護福祉士 男性 52才)

6日、茨城県つくば市や栃木県真岡市、益子町などで竜巻が発生した。家が全壊、半壊した住民の方々の早期復興に、微力ながら、私の考えを聞いて頂きたい。

被害にあった家の修理、建て直しには膨大な費用がかかるだろう。保険でカバーできる部分もあるかもしれないが、自腹を切らざるを得ないと察する。そこで、東日本大震災のように、被害地域を除く全国のコンビニやスーパーを中心に早急にカンパを募ってほしい。

本来なら政府が主導権を握り国民をリードするものだが、7日の朝現在で対策会議が行われたとか、野田佳彦首相の緊急記者会見が開かれたという話を少なくとも私は聞いていない。

だから私たち庶民がうごかなくてはいけない。不安にかられる住民に「全国からの応援がある」との確信を抱いていただくことがまず肝要だ。

また家や道路の片付け、お年寄りのケアなどにたくさんの人手も必要だろう。ボランティアも地元とよく話し合っ、募集を始めてほしい。

ただ、これは混乱を防ぐためにも行政が音頭を取ることを望みたい。さあ、行動を開始しよう。

〈講評〉

・東町健太（選考委員長）

鋭い舌鋒の日本人論である。たとえどのような災害が起きても、自分は関係ないという態を装う日本人の姿を鮮やかに浮かび上がらせた筆者の文章力に感嘆した。「さあ、行動を開始しよう」といいながら、「私たち庶民が動かなくてはならない」といいながら、実際に動くのはコンビニやスーパー、おそらく自分では行くつもりのないボランティアだけ、というなんとも異常なことが今この国でおきているのだ。筆者はこの文章を通してそんな現状に警鐘をならす。日本人の事なかれ主義はここまできたか、と背筋の凍る思いであった。

・オパーリン（選考副委員長）

自然災害とは残酷なものである。被害にあった人には何の非も無い。が、それと同時に被害にあわなかった人間にも非は無い。それは政府もまた然りだろう。つまり、自然災害は誰のせいでもないのである。そして、起こってしまった以上、「その後どうするか」こそが重要なのである。

さて、今回の場合はその後、誰が、どう動くべきなのであろうか？私などは地方自治体レベルで対処すればいいのではないかと思う。で、金が足りないようなら政府がその自治体に必要分を渡せばいいと思う。全国の出来事を統括する立場の政府が出張ってきては逆にワッチャカとして解決が遅くなるのではないかと思う。

何でもかんでも「野田憎し」では芸がない。ただ悪口を言うだけなら誰にでも出来る。そのことを気づかせてくれる秀逸な作品であったため、佳作にふさわしいと思われる。

## 第五回 『生き恥を、晒して足掻く、私かな』 オパーリン

### 第五回 『生き恥を、晒して足掻く、私かな』

執筆者 オパーリン

・ 8、「水子、水子たる所以」

第6章『焦燥、乱痴気』、第7章『仮面の国』、この2作が僕が途中で書くのを辞めて放り出してしまった水子たちである。可哀想なことをしてしまったと思うけれども、「あ、こりゃダメだな」と思い、もうそれ以上書き進めなくなってしまうのだから仕方が無い。

これらの水子達は何故、途中で書かれることを放棄されてしまったのか、本章に書くことでこれらの水子達を吊ってやりたいと思う。

私小説的要素とフィクション的要素を絶妙にマッチさせた力作と自負していた『灰色ネオン』を滅多打ちにされ、その自負が文字通り自負でしかなかったことに気づいた僕は、「やはり物語を作らなきゃダメなんだ。」と私小説を見限り、物語（フィクション）に傾倒しようとしていた。そんな気分の中で執筆が試みられたのが上記の二作なのである。

『焦燥、乱痴気』は「カルト」をテーマに書こうと思って書き始めた。人里離れた森の奥、文明から隔離されたカルト教団の狂気を書く予定であった。また、フィクションであるということ意識して、主人公の認証を「彼」にするという三人称の手法にも挑戦した。書き出しは上々であった。教団に洗脳されそこない、違和感に苛まれて悶々と苦悩する彼。中々上手く書けたと思った。

しかしながら、書いている途中でムクムクと湧き上がってくるわけ、疑問が。「これ、書く意味あるか？」と。一連のオウム真理教の事件があったこの国の言葉で、この国の人に向かって、俺はこの小説で何を提示できるわけ？と。森達也が『A』を撮った後で、俺は何を言えるの？って。そう思ったらもうダメだよね。パソコン画面の前に座ってるんだけど、何にも打ち込めない。放棄したよ。

でもさ、本章を書くにあたって読み返してみたんだけど、なんか続き書けるかもねこれなら。今なら。やっぱり時間を置くっていうことが必要ときもあるのかもしれないね。まあ、機会があればやってみようと思う。

『仮面の国』は「管理社会」の恐怖をテーマに書こうと思ったんだっただけ。でも書き始めたらさ、全然イメージが湧いてこない、つまり、文章の中に「具体」が何も無いんだな。そして、ただただ巨大過ぎるテーマを前に唾然と立ち尽くしていたね。こっちの方は、ここで止めといて良かったのかもしれない。後にジョージ・オーウェルを読んでそう思った。

と、こんな感じで僕はテーマを決めてフィクションを作り出していくことに挫折した。結局何がダメだったんだろう、と考えると、その時の僕には真つ更な空間に「虚」を打ち込んでそれを「実」に変えていく力が無かったんだと思う。別に今も無いのだろうけれども。自分に全く何の関係も無いもの、自分が体験してきていないものに対して想像して書く、って事を何となく拒絶しているのかもしれない。

あと、極端にフィクションに振れ過ぎたってのもあるのかもしれない。自分の身近な体験から初めて、そこから段々と虚（創作）を織り込んでいく、みたいな感じにすれば上手く最後まで書けたのかもしれない。

例えば、人が誰も歩いていない大学の構内の道でタバコを吸ってたなら、遠くからオジサンが何か叫びながら近づいてきたことがあってさ、何かと思えばそのオッサンは俺の歩きタバコにマジギレしてたんだよ。「い、今すぐに、消せえええええー！！」みたいな感じで怒鳴られてさ。俺はあまりに予想外の出来事にビックリして、その時はオッサンの命令に従っちゃったんだけどさ。そこからちょっと変えて、抵抗して、怒鳴り合いの喧嘩になって、あくまでレジスタンスを貫く、みたいにしてみよう。その出来事を契機に主人公が嫌煙家と戦うみたいなストーリーにしていくとかさ、そういう風にすればうまくいったのかもしれない。

まあ、何でもか分かっていたら解決しているわけで、分かんないんだけどね。

・ 9、「現在と過去、時制の取り扱い。『存在と記憶の距離感』について」

さっき言った2作の水子の失敗があつてさ、「やっぱ俺にはフィクションは書けん、私小説で行くしかない！」って気分になったわけ。でもさ、私小説で「今起こってること」を書くと、主人公が何もしないで延々とグタグタしている描写しか書けなくなるわけで、それじゃあちっとも面白くない。ということで、過去の自分の「何かした」経験を書くことになる。で、具体的には「よし、俺の童貞喪失ネタを棚卸ししよう」と決めた。

でも、この頃には「起きたことをただそのまま書く」だけじゃマジで日記だということも認識するようになって、「そこはどうか工夫しなきゃなあ」と思った。「でも、どうしようかなあ。」と思いながら、当時の事を記憶の引き出しから引っ張り出して、脳内で再生させ始めていた。

思い出してみると、それはとんでもなくとんでもない思い出であつた。かいつまんで話すと、僕が筆下ろしをした相手は真性の淫乱で、図書館、カラオケ、映画館、どこでも僕にペッティングを要求した。当時、16歳だった僕は年相応に青臭い砂利ガキで、薄っぺらい恋愛青春小説に出てくる様な、そんな恋愛がしたい、とそう思っていた。人生とか、愛とか、尾崎豊とか、村上春樹とか、そんなことを彼女とおしゃべりしたいと思っていた。しかし、彼女が欲しかったのはチンコ、「ただそれだけ」であり、僕が彼女と共有したかった「何か切ない甘酸っぱい、淡い恋心」的なものは彼女にとって「無用なもの、全く理解できない、する必要を感じないもの」、つまりは雑音でしかなかった。だから、僕がそういう「何か抽象的っぽいこと」を話し始めても、彼女は一切反応しなかった。拒否したのではない、そういう話をしているとき、彼女はただ虚ろだった。彼女はただ肉棒が欲しかっただけ、肉棒と僕の話に何の関係があるのか一切分らなかったのだ、きっと。

で、その彼女と出会ったのは女友達の紹介だった。彼女はその女友達の従姉妹だった。その女友達は中学生だったのに援交をし、家出をし、学校には行っていない女の子だった。両親は離婚し、母親からは暴力を振るわれているということだった。

と、そんな風に当時のことを思い出していたら、その事実のあまりのこと具合に、「これ、本当に自分の身に起こった出来事なのかな？俺が脳内で捏造した出来事じゃないのかなあ？」と疑問が湧いた。そして、彼女達は今どうしているんだろう？と思った。そんなことを考えていたら、自分の記憶全体が疑わしくなってきた。世界でただ一人、俺だけが再生できない俺の記憶、そんなものが果たして「事実」だと、だつたと言えるのだろうか。

そんなこんなで、思考の堂々巡り（結構いつもやっているだけけれど）をしている途中で、「あ、この悶々している「今」を、この「この記憶本物？」っていうモヤモヤ感自体を小説にしちまおうか」と思いついた。つまり、「時間」とか「記憶の存在の不確かさ」というものを小説に織り込んでしまおうと考えたわけ。そうなるなら「現在」も書かなきゃな、とか考え、現在から書き始めて、「過去」を回想させて、また現在に戻ってきて、主人公が記憶の曖昧さに紋々して・・・、とどんどんとイメージが湧き上がってきた。

そこで、タイトルを『存在と記憶の距離感』に決めて、書き始めた。書いている途中で、「彼女の「現在」も書いてみようかな」と思いついた。その彼女とは16歳の時に数回セックスしたきり音信普通なので、彼女の現在を書くにあたっては当然「フィクション」を書くことになる。でも、この小説を書いている時は、なんだか書ける様な気がして、勢いに任せて書き始めたら、何とか書いてしまった。彼女は今、企画単体もののAV女優になっているという設定にした。

がしかし、事はそうスムーズには行かなかった。自身初の女性視点、彼女の現在の章を書き終えた後、筆が止まった。終わらせ方が分らなかったのである。書いているこの時点では、「存在と記憶の距離感」について、僕は何の答えも出せていなかったのである。まあ、考えてみれば当然のことなのではあるが。何故かという、「今、自分が何者で、どこにいて、どこに向かおうとしているかが分からない。それを知りたい。」という思いが、僕にとって小説・文章を書く大きなモチブの一つとなっているからである。だから、私小説が現実の僕の「今」に追いついたときに、筆は止まってしまうのである。

ラストに思い悩む内に、僕の中で絶好調であつた創作意欲がしぼんでいった。僕の創作意欲はまるで躁鬱病の躁状態のように、突如としてやってきては急にしぼむ、というパターンを繰り返している。その躁状態が終わってしまったのだ。そして、この小説は未完のまま長らく放置されることとなった。

僕は勢いだけで小説を書いている、書いている途中でその勢い（創作意欲）が萎えてしまうと、その小説は大体が完成することなく葬られ、つまり水子になってしまう、ことは書いた。しかし、この小説『存在と記憶の距離感』は違つた。

長らく放置された後、ある日突然、僕の頭の中にラストシーンのイメージが鮮明に浮かび上がった。そう、あれはまるで降ってきたみたいだった。イメージが逃げてしまう前に書かなくてはと思い、その晩、部屋に引きこもって一気に書き上げた。かくして『存在と記憶の距離感』は完結し、水子化を免れたのである。

何故だろう。何故、この小説は完結したのだろうか。それは当然、僕が書いたからなのであるが、書かれなかった小説（水子達）もあったわけで、そんな中でなぜこの小説は書かれることが出来たのだろうか。それは、分らない。いやね、後付で色々理由を並べ立てることは出来るのかもしれないけれどもね、結局のところ、本当の理由なんて、僕にはわからない。この小説は書かれることを他の水子達よりも強く欲していたからなのかもしれない。

まあ、何はともあれ『存在と記憶の距離感』は僕の小説第5作として完結し、書き上げてみれば自身最長（原稿用紙約95枚）の小説となった。まあ、長けりゃいいってもんではないのは重々承知しているけれどもね、でもやっぱり書いている側としては長いのが書けると嬉しい。それだけ自分の構築した空想空間が豊穡な気がして。で、次はもっと長いのを、って気分になる。

## ・10、「夢と現実。『夢風船の君、現実のママ』について」

前章で『存在と記憶の距離感』が第5作だって書いたけど、ここでは第4作について言及していく。第三作『灰色ネオン』の後、二作の水子、『存在と記憶の距離感』の完結目前での頓挫ときて、第4作の『夢風船の君、現実のママ』は第5作の頓挫期間中に書かれた。

例の学生文芸賞に二年連続で落選して、三度目の正直とばかりにこの小説を書いた。この頃僕は『空気人形』っていう映画を見てえらく影響を受けてさ、ちょうど金も無かったし、風俗通いもただ虚しいだけだから辞めたいって思ってさ、買っちゃったんだよ、ダッチワイフを。だけでも安物だったから股間部分のオナホを入れる穴が小さくてさ、オナホが中々入らないんだ。でも何とかしてオナホを装着して、いざ結合！って、入れてみたらチンコに激痛が走った。で、結局ミュキ（そのダッチワイフの名前）との初夜は失敗に終わった。

僕はその出来事に酷く落ち込んだ、「ああ、おれはダッチワイフにさえ拒まれるのか」ってさ。で、自己嫌悪に悶えながら思ったんだ「この苦しみをこそ小説にしなければ」と。『空気人形』はダッチワイフの視点で進行する物語だったんだけど、僕はその持ち主の最低でどうしようもない男（映画内では板尾創路。名演だった。）の物語を書きなきゃ、って思った。

それで一気に書き上げたのが第一章「夢風船の君」の部分。

現実がしようもなく思えるのは自分がしようもないから。そんなしようもない「僕」は現実が嫌だから、ユートピアを創り出そうとし、そこに逃げ込もうとする。でも、チャチな幻想は崩れ去る、正確に言えば「僕」は自らもってそれを投げ捨てる。やっぱりそれはどこまで言ってもイミテーションに過ぎないから。

で、僕はここまで書き終えて、第二章「現実のママ」の部分に着手する。イミテーションの夢を放り捨てたら、そこにあるのはやはりただのしようもない現実、以前と全く変わらず。僕はまだ幻想としての夢に名残惜しさを感じ、また夢を見る。初恋の女の子の夢。それはそれは幸せな夢を見ようとする。でも、現実が夢を侵食する。どんなに理屈をこねくり回したところで、夢は夢でしかなく、僕が「いる」、この悲惨な所こそが、あくまで現実なのだ。僕は目覚め、街に出て、年老いて体の崩れた異国からきた娼婦を買う。

という話だ。いつになく憑かれたようになって一気に書いた。完成後に読み返して、この小説は物語になったと、日記ではなく物語になったと、僕は自負した。それでいて、嘘っぱちではなく、その物語の中に本当の僕がいる、と思った。たまらなく嬉しかった。気持ちよかった。僕は勝ったんだ！！と思った。このクソツタレな世界に、勝ったと思った。

矢も盾もたまらず、印刷して親友に渡した。親友は「あれ、良いわ」と言った。その顔に偽りはなかった。他人の気持ちなんて理解することは出来ないんだけど、あの顔は、本当の顔だった。

彼の「あれ、良いわ」という声は、今でも精確に僕の脳内に響かせることが出来る。その時の彼の声は、その一瞬で無くなり、この現実には今はもう存在しない。でも、俺の脳の中には、今でもはっきりとそれは「ある」んだ。で、それは、俺がこの世界に存在し続ける限り、彼の声は「あり」続けるということなんだ。

この事実は、文章を書くという事とも大いに関係していると思う。俺の脳にあるもの、もっと言えば俺の脳の中にしかないもの、それを文章にした瞬間、それは俺以外の誰かの（つまりあなたの）脳内で再生されることが可能になる。で



、俺の書いた文章があなたに読まれ、あなたの脳内に再生され、あなたの脳内にも「ある」ようになる。

ここで僕が気になるのは、そのプロセスを経てあなたの脳内に「ある」ようになったものと、その元となった僕の脳内にあったものは、果たして同じか、ということである。それが同じだと確かめる術はない。だから、親友が『夢風船の君、現実のママン』を読んで「良いわ」と言ったとしても、僕と親友が同じ光景を見て、同じ感性で感じ、「良いわ」と言ったかどうかは分からない。いや、確かめられない。

けど、確かめられないけれど。僕には分かる。僕が脳内でみた光景と、彼が僕の小説を読んで脳内に再生させて見た光景とは違うものだ。似たような光景、であっても、それは確実に違うものだ。で、その違い、言ってしまえば「必然としての誤読」を、僕は歓迎しようと思う。何の問題も無い、そう言い切ろうと思う。僕達は誰しもが「すれ違い続ける」のだ。それで何の問題も無い。

余談だが、三度目の正直で投稿したかの学生文芸賞は初の予選落ちという結果で終わった。俺は外面では悔しがっていたが、内心は「バカが！！」と思っていた。そう、俺は人の話を聞かない人間なのだ。そう、俺の辞書には「反省」という文字など無いのだ。

つづく

## 「第十四回文学フリマ」 オパーリン

---

「第十四回文学フリマ」

執筆者 オパーリン

2012年5月3日、つくばにあるオパーリン宅にて、僕と東町健太は酒を飲みながら文学フリマ用のポップの文句を考えていた。如何に人目を引くキャッチコピーを作ることが出来るか、文学フリマで売れるかどうかはそれにかかっている。僕達は思いつくままにノートに書き付けていった。

その時、僕達は絶好調であった。一つのアイデアがいくつもの新しいアイデアを生む、まさにそんな状態であった。自分達は天才コピーライターだと思った。テンションはマックスだった。でもそれは全部お酒が見せた幻に過ぎなかったのだ、と全てが終わった今になって思う。

その時思いついた「キャッチコピー」のいくつかを紹介しよう。本当は全て紹介したいところだが、今そのノートを見返して、あまりの悲惨さに気が滅入っている。これを全て紹介してしまうと、僕の中の大切な何かが失われてしまう気がする。いやしかし、あらゆる情報を開示し判断は読者に任せる、それこそがジャーナリズムの基本理念である。読者の方にこの様なものを見せなければならないなんて、僕も心苦しいが、仕方ない。全て後悔しよう。

[キャッチコピー案]

- ・一番悲惨なプレゼント
- ・大好きだよ、お母さん・・・ビンビンだぜ！
- ・お母さんと・・・俺のガマン汁
- ・父に欲情して
- ・自己紹介 好物：ゲロ、ゴキブリ  
趣味：チン毛抜き、スカトロ
- ・アナルシズム
- ・働きたくないから本作りました
- ・一揆！
- ・I Love 無毛地帯
- ・ジョニーはちよんの間へ行っった。
- ・僕は蛆虫
- ・はばからない！
- ・呼吸やめます！
- ・息するのやめます！
- ・呼吸、やーめた！
- ・憂鬱なメシア
- ・そうだ、天国へ行こう。
- ・ダライ・マラ
- ・梅毒天国
- ・せんずりに夢中
- ・耕やらん
- ・あかんかった
- ・頭に梅毒が回りました。
- ・こんにちは、絶望
- ・要約：マンコ、おまんこ
- ・チンコが勃起しません

- ・ヴァギナ中毒
- ・まんこ！～僕達は覚えたての中学生
- ・老いたウエルテルの朝勃ち

ふう、キャッチコピー案は以上である。改めて見返してみると、「ゴミだな、俺」とつくづく思う。酒の力とは本当に恐ろしいものである。こんな酷いキャッチコピーを考えては爆笑し、

「俺達いけるよ！」

と興奮していたのである。

結果として、

- ・一番悲惨なプレゼント
- ・大好きだよ、お母さん・・・ピンピンだぜ！

の二つが採用された。

しかし、実はノートに書かれているのはこれだけではないのだ。その時の僕達はキャッチコピーを考えているうちに、ある問題に直面したのである。「差別語」というヤツである。「体が不自由な方」とか、とても回りくどい言い方に変えなきゃいけない、みたいなやつである。

あの差別的表現への規制というヤツは「言葉狩り」ではないのか、と思った。そこで、なんかもう文フリ用のキャッチコピーとかはどうでも良くなって、僕達は考えうる限りの差別語をノートに書き付けたのだった。だが、これについて書き出すと話が長くなるので、差別についてはまた別の機会に触れることにして、文フリの話の話を続けよう。

文学フリマの説明をしてなかったね。文学フリマは簡単に言うと「自分が文学と信じるものを売る会」である。まあ、趣味で書いた小説を売るフリーマーケットである。大学の文芸サークルとかも参加している。

で、その文学フリマの第十四回に僕も「オパーリン」名義で参加したわけさ、小説集『アダバナ』と月オパ各種引っさげてさ、東町健太氏のエッセイ集『バカが吼える！』も引っさげてさ。

で、文フリ当日（5月6日）、会場（東京流通センター）にて。僕は猛烈に後悔していたね、各本20冊づつ印刷してきてしまったことを。だってさ、売れ残ったらもって帰らなきゃいけないんだよ、キャリーバック一杯にして持ってきたあの本の山を。

僕はげんなりしていた。女性達がポップを一瞥した後、僕達に注がれるあの侮蔑の目。けっこう辛い。そして、何を思ったか野郎まで「ふん、バカが」みたいな目で見ってくるのだから驚く。あいつらだって頭の中はこのポップと大差ないだろうに、偉そうに見下しやがって！

結果として、意匠を凝らして考え出したポップは完全に裏目に出ていた。人が皆、僕達のブースを避けて通るのである。冷静に考えれば、当然なのかも知らんがな。

売れないと、自信がなくなってくる。最初は「300円」とか調子に乗っていたのだが、時間が経つにつれて200円、100円、と値崩れし、最後は「無料、取り放題。というか、持って帰るの重いんで、貰って下さい。」という状態になっていた。上野にいる婆の立ちんぼと同じ心理状態である。

が、値引きの努力も虚しく、僕は大量に余った冊子を持って帰るハメになったのであった。



↑開始直後、まだ売れないと知らずにはしゃぐバカ。

## 「昆虫食のひるべ」 オパーリン

「昆虫食のひるべ」

執筆者 オパーリン

「ヒロトさん（僕の本名）、実は明日、阿佐ヶ谷で「虫を食べる会」っていうのがあるみたいなんですけど、行きませんか？」

そんな電話がかかってきたのは5月19日の夜である。電話の主はもちろん東町健太氏である。僕はこの電話の話を聞いて、絶望した。僕は虫が苦手である、どちらかという大嫌いである。それも、食う食わないという次元ではなく、見るのが嫌いである。僕は絶望しながら即答した。

「行きませぬ。」

そう、物書きを自称している以上、たとえアマチュアであろうと、そんな面白そうなイベントを知って「行かない」と言うわけにはいかないのである。僕の前には選択肢など無いのである。

虫とは、本来は食べ物ではないはずである。いや、一部の地域では伝統的に蜂の子とかイナゴとかを食べる、というのは知っている。知ってはいる。しかしそれはあくまで珍味的な感じで食べるのであって、とんかつとか生姜焼きとか焼き鳥とかハンバーグとか、そういうオカズと言われるものと同列ではないはずである。と、僕は思っているが、虫を食べる地域ではオカズ並みに虫を食べるのかもしれない。分らない、何しろ今まで僕は一度たりとも「虫を食べよう」と思ったことは無かったのだから。

と、そんなこんなを考えていて、結局よく眠れないまま当日がやってきてしまった。昼前に御徒町で東町健太氏と落ち合い、阿佐ヶ谷に向かう。

電車の中、二人ともいつも以上に饒舌である。

オパ「いや、案外美味しいと思いますよ。なんか海老みたいな味がするんじゃないかなかったですか？」

東町「海老かあ、だったら全然ご馳走じゃないの。」

オパ「そうですね、ご馳走ですよ。世界には虫を食べている人も沢山いるわけですし。第一、イベントとして成立している以上は、そこまで不味いものを食わされるはずは無いじゃないですか。逆に美味くてハマっちゃった場合を心配した方がいいかもしれませんね。」

東町「そうだよな。人前で「あー、ゴキブリ食いてえ」とか口走るようになっちゃったら、むしろその方がやばいもんね。」

とまあ、こんな感じで僕達は途切れることなく話し続けた。会話が途切れると、必死に押さえつけてきた不安が噴出してしまふような、そんな気がしたからである。

そんなこんなで阿佐ヶ谷駅に到着。ホームを下りると、ゴミ箱の前でゴミ袋に囲まれて座り込んでいるオジサンがいた。改札を出て駅前ロータリーを歩いていると、警備員のオジサンがガードレールに腰掛けて、暇そうに足をブラブラさせながら呆けていた。健太さんと「警備しろよ！」と突っ込みを入れて笑った。二人とも阿佐ヶ谷に下りたのは初めてであるが、どうやら結構面白い街のようである。

「昆虫食のひるべ」の会場である「夜の午睡（よるのひるね）」は駅から程近いところ（徒歩2、3分くらいかな）にあるなかなかお洒落なバーである。店内にはサブカル系の漫画や本が沢山置かれていて、根本敬の本も沢山あった。今度は虫とは関係なく行ってみたいなあ、と思った。

店に着くともう何人も人が集まっていて、店の外に机を出したりコンロや鍋を用意したりしていた。どうやら屋外で調理するらしい。店に入り、店主の方に参加費2000円を支払い、その日の料理のレシピを書いた紙を貰い、いざイベント参加である。

当然の事なのであるが、用意される鍋やコンロ、ハサミ等と一緒に食材である虫が調理台に置かれている。蟻の子とかイナゴとか、カイコのさなぎとかである。中でも一番「うわっ」となったのがマダガスカルオオゴキブリである。この食材は生きていたのだ。この会の企画者(?)である内山さんという方が、その生きているマダゴキを手にとってみんなに説明している。

準備も終わり、調理に取り掛かった。調理はね、基本的には普通の料理とそう変わらない。ただ、今まで嗅いだことの無い独特な臭い（別に嫌な臭いではない）がするのと、昆虫を茹でると大量の灰汁が出るということが特徴的である。

揚げたり茹でたりの下ごしらえは屋外で行ったのだが、その後の本格的な調理は店内で行った。といっても、僕と東町はやり方も分らないのでただ眺めているだけであった。

料理、完成。そしていよいよ実食である。この日のメニューとその感想を紹介していく。

・「トマトとアリノコのナムル カマキリベビーチラシ」

基本的にはサラダ。アリノコは特に味は無い、その分香りとかも無い。問題なく食べられた。カマキリベビーは素揚げしており、ジャコみみたいだった。これも臭みは無く、問題なし。この料理は普通に美味しく食べられた。

・イナゴとカイコガのチヂミ

見た目はイナゴの入ったチヂミ。味はチヂミそのもの。が触感は、イナゴの脚とかが口の中に刺さり痛い。また、ずっと食べていると独特の臭いが気になってくる。

・マダゴキとサクサン（たぶんカイコのこと）とキムチのチーズ焼き

これはこの日のメインディッシュであろう。せっかくなので、貰ったレシピに書かれているつくり方を紹介しよう。

[作り方]

- 1、マダゴキは熱湯で殺し、開き、オスは臭腺をピンセットで抜く。
- 2、サクサンはゆでて半分にカットする。
- 3、熱したフライパンにサラダ油をひき、マダゴキとサクサンを炒め、コショウを振り、キムチとカットしたタマネギを加えてさらに炒める
- 4、チーズをのせ、フタをしてチーズを溶かす。

※食べ方の注意

マダゴキの殻は硬いので、歯でしごくようにして中身だけを食べる。サクサンの殻も気になる人は同様に中身を食べて殻は残す。

という感じである。ここで、レシピの手順1の「臭腺」という言葉に注目していただきたい。臭腺というのはホルモンを分泌する腺の事で強烈なワキガの臭いがするらしい。内山さんが説明してくれていた。そして、実際に下準備の際にピンセットで除去していた。

お客さんの中に一人、僕達と同年代位の男の子がいたのだが、この人はマダゴキを2匹つがいで貰っていた。昆虫好きなのだろうか、家で飼うらしい。で、この人はマダゴキの臭腺にも興味心身で、切除された臭腺を「食べたい！」と自ら志願して食し、悶絶していた。

まあ、なにはともあれ完成したこの料理、見た目はゴキブリとカイコのサナギの炒め物といった感じだ。そのままじゃん！と言われてしまいそうだが、僕には例えるべき類似の料理が思い浮かばないので、こう書くよりほか仕方あるまい。

で、いよいよ実食である。が、僕がチヂミに時間をとられていたためか、いざ食べようと思ったらもうマダゴキが残っていないのである。カイコばかりが残っている。先に食べていた東町に聞くと、「カイコよりマダゴキのほうが食いやすい」との事。

せっかく来たのだから一通りは食べて帰りたいと思うのが人情であろう。隣のテーブルに行き、余っていたマダゴキをおすそ分けしてもらった。そしていざ実食である。

マダゴキを箸で持ち口に運ぼうとする。が、中々踏ん切りがつかない。やっぱり一気に食うのは難易度が高い。レシピの冒頭にも昆虫を初めて食べる際の注意として「まれにアレルギー症状が起こる場合があります。初めての方は少量からお試してください」と書いてあった。

僕は一気に食いを諦め、少量を取るためにマダゴキの白い身に箸を入れた。中々上手く取れない、何か灰色の物が出てきた。

次の瞬間、激臭が僕を襲った。暴力的なワキガ臭である。完全に戦意を喪失してしまった僕は、箸を置き、内山さんにマダゴキを見せて「これ、臭腺ですかね」と尋ねた。内山さんは「ああ、本当だね。取り忘れちゃったんだね。」と言ってニッコリとした。

そのマダゴキを食べることを断念した僕は、健太さんが食ったマダゴキの残骸に少し残っていた身を貰い、食べた。

少量だったからか、特に味はしなかった。カイコは、少し粉っぽいクリーム？みたいな感じだった。

以上が昆虫を食べてみての報告である。帰り際、内山さんの著書『昆虫食入門』を買い、サインを貰った。「b a g e a t 内山」と書かれていた。なんか、バクシーシ山下と響きが似ているなあ、と思った。

虫を食べてみて思ったことを簡単に書こうか。まず思ったのは、昆虫食の世界は僕が想像していたよりも遥かに奥が深いものだったということだ。一回だけちょこっと食べたぐらいでは、とてもその真価は分らない。

そもそも、僕はこのイベントを知って「何ですき好んで虫を食べるんだろう？」と不思議に思い、それを知りたいと思った。理由があると思っていて。だが、その疑問の設定の仕方自体が適切ではなかったのかもしれない。美味いから食う、それだけなのかもしれない。まだ読んでないが、内山氏の著書にはその虫を食う理由が書かれているのかもしれない。

少なくとも僕にとって昆虫はそんなに美味しい食べ物ではなかった。ただ、初めて食べたから慣れていないだけで、これから食べ続ければ好きになるのかもしれない。あくまで現時点においてはという意味でだ。帰りに、健太氏と中華料理屋に入って餃子定食を食べた。とてもとても美味しかった。

僕は昆虫と餃子を比べれば餃子の方が好きだ。だから餃子を食べる。昆虫と餃子、という様に、自分が食べるものを選択できるうちは昆虫を選ばないのではないかと思う。だがそれはあくまで僕個人の好みであって、昆虫を好きな人の趣向を否定するものではないことを断っておきたい。

むしろ、昆虫を食べるということに限らずに、あらゆる選択肢は可能性として担保されるべきだと思う。それこそが多様性のある社会というものであろうから。



↑会場となった阿佐ヶ谷にあるカフェバー



↑腹を開いたマダガスカルオオゴキブリ。



↑ 完成！



## 「ゆるカフェ（byレインボー・アクション）」 オパーリン

---

「ゆるカフェ（byレインボー・アクション）」

執筆者 オパーリン

まず、「ゆるカフェ」だけではどんなイベントだったのか分からないから、軽く説明しよう。ゆるカフェは「セクシャルマイノリティー」をキーワードにしたコミュニケーション・相互理解を目的としたイベントのようであった。レインボー・アクションという団体が主催しているイベントであった。その名に「ゆる」が付いていることもあってセクシャルマイノリティーではない人も参加して大丈夫な様子だった。

基本的に、ここ最近のイベント参加は東町健太氏が見つけてくることが多いのだが、今回も東町氏の発案により参加するに至った。

参加者はセクシャルマイノリティーである人とそうでない人（ヘテロセクシャルというそうだが、僕や東町氏もここに分類される）が半々くらいであった。そして、色々なタイプの人々が参加していた。で、主催者の方はこの構成比が意外だという感じの反応をしていたので、他の子のようなイベントではヘテロセクシャルの人の割合は少ないのかもしれない。

イベントの概要としては、参加者の人達が自分の事情を話したりしながら、広くセクシャルマイノリティーについて話した。

参加しての感想としてまず思ったのは、専門用語というか、区分けが多くて、しかもそれぞれの定義が結構複雑であるということである。僕は予備知識なしで参加したのだが、そういう用語知識の問題で話が理解できないことが多少あった。が、「分らない」というと議事進行の方が親切に説明してくれた。

僕のような初心者がこの問題にとっかかる、という点においてはこの用語等の問題は結構なハードルになるということもまた確かだが、色々な性のタイプを定義しないことにはそれについて議論したり考えたりすることも出来ないというのもまた事実なので、けっこう難しい問題だと思う。

実際、このルポを書くにあたって、その問題に直面している。出来るだけ誰にでも分るように書きたいのだが、最低限用語の説明をしなければそのことについて何も書けないのである。そして僕にはその知識が殆ど無いのである。

じゃあ、書くなよ、ということになってしまうのであるが、それではどんどん排他的になっていくというか、この問題が広く多くの人に考えられる問題にはなっていない。マイノリティーの問題は如何に一般の人が認知するか、というのが重要なポイントの一つだと思うので、門外漢である僕でも（偉そうにしたり、分ったようなことを言うのではなく）自分に関係のある問題として考えるということが必要なんじゃないかなあ、と思って、イベントに参加したり、この文章を書いたりしているのである。

それでも、僕が調べた範囲で用語の説明はしたほうが良いと思う。なぜなら「色々」と書くだけでは、どう「色々」なのかは伝わらないからである。なので、説明してみる。間違っていたら申し訳ない。

まず、僕は異性愛者（ヘテロセクシャル）である。男性器を持ち、心も男性で、性の対象は女性。女性器を持ち、心も女性で、制の対象が男性、という人もヘテロセクシャルである。

で、その対義語としてホモセクシャルというのがある。一般にゲイとかレズと呼ばれる人達である。ゲイは男性同性愛者、レズは女性同性愛者。

その他に、トランスジェンダーというのがある。これはウィキったのだが、定義がややこしすぎて、しかもどうやらまだその定義が確定しきっていないらしい。日本語訳も適切なものが出来ていないらしい。性同一性障害という言葉があるが、その言葉が差別的だということで出来た言葉であるらしい。

そして、両性愛者（バイセクシャル）というのもある。これらレズ、ゲイ、バイ、トランスジェンダーの人達を合わせてLGBTというらしい。

また、このイベントで初めて知った言葉としてはパンセクシャル（全性愛）、Xジェンダーというものがある。パンセクシャルは性別にとらわれず、特定の人間に恋することが出来る者の意（ウィキ）だそうだが、バイセクシャルとの違いが結局分らなかった。Xジェンダーは自分の「性」が何なのか分からない人だそう。

ざっとこんな感じである。何故こんなにも色々な分類、呼び名が出来てしまっているのか。その理由を、素人ながら考えてみる。

まず第一に、「その呼び方は「差別」だ」と言って、次々と新しい呼び名を創るという事が繰り返されてきたというのがあるだろう。これはセクシャルマイノリティーに限らず、「差別表現」全体にいえる事だろう。「体の不自由な方」とか「あいりん地区」とか「と畜場」とかそういう類の言葉狩りだよね。この種の言葉狩りは、僕には問題の本質から遠ざかるとしか思えない。

第二に、セクシャルマイノリティーの人達の願望というのがあるんじゃないか、と僕は思うんだ。どういうことかという、彼らは社会から差別されたり疎外されていると感じている、つまり自分の居場所が見つけれないと感じている。だからこそ、居場所としての「自分を差す呼称」を求めているんじゃないか、と思うんだ。何者でもなかった自分が「呼称」を得ることで、何か居場所を見つけたような気分になるんじゃないか、と思う。もちろんこれはあくまで憶測に過ぎないんだけどさ。

と、考えてばかりいるとルポではなくなってしまうのでこれぐらいにしておこう。最近、史上初の身体障害者芸人のホーキング青山さんと言う人が書いた『差別をしよう！』という本を読んだんだけど、差別についてはこの本を切り口にして別項で書こうと思う。

# 「「差別」このややこしき言葉ーホーキング青山『差別をしよう！』から考えるー」 オパーリン

---

「「差別」このややこしき言葉ーホーキング青山『差別をしよう！』から考えるー」

執筆者 オパーリン

・はじめに

この一冊を読んで、今まで上手く整理できずにモヤモヤとしていたものが、すっと腑に落ちた様な、そんな気分になった。差別。たった漢字二文字のこの言葉だが、考え出せば無限の奥行きを持っていて、一度その泥沼に足を掬われてしまうと、抜け出すことは中々に困難である。「何でこんなにややこしいんだろう」とその思いから、今まで僕は結構色々な「差別の現場」と言われるところに行き、そこにいる人の話を聞いたりして、あーでもないこーでもないと考えてきた。

それでも泥沼にとらわれ続けている、今もなお。

自分の中でさえ解決もしてないのに、なんで差別についての文章を書こうと思うのか。そう言われてしまいそうだから、先回りして説明しよう。

冒頭にも少し書いたけれども、ホーキング青山氏の著作『差別をしよう！』を読んで、今まで頭の中でこんがらがって上手く整理できないでいたものが、少し整理されたような気がした。そして、今まで断片的だった色々な「考えの破片」みたいなものが、少し繋がった様なそんな気がした。

だから今のうちに、というとおかしいかもしれないけれど、もう一度こんがらがってしまう前に、文章にしておきたいと思ったのだ。解答ではない、暫定的な到達点として。

・非当事者として、「差別」との関わりから、

今までの人生の中で、僕は「差別される側」として、つまりは当事者として差別を受けてきたという記憶はない。実はされていたのかもしれないけれど、本人としてそれを意識したことはないということだ。では逆にしてきたことは、と考えると、まあ、結構あると思う。自分で思い出せるだけで結構あるのだから、自分は意識していないけれど実はしていた、なんてことはもっとあるのだろう。

した、されたはひとまず置いておいて、僕の人生の中で「うわ、これは差別だろうな」と感じた事例を具体的に思い出していこうと思う。

小学生の頃、クラスに身体障害者の同級生がいた。具体的にどういう障害なのかは分からなかったけれど、指に障害があった。で、クラスみんなはその障害について揶揄したりバカにすることはなかった。しかし、その同級生は極め付けの虚言癖があった。友達と習い事をしていると割り入ってきて「僕もそれを習っている」という。で、どんどんと習い事が増えていって、終いには20も30も習い事をしていることになっていた。その他にも、その当時ポケモンカードが流行っていて、その中でもロケット団カードというのがどこに行っても売り切れで、それを持っている子はちょっとしたヒーローであった。まあ、4、5枚持っていればすごいという感じである。と、その同級生は「俺、50枚持っているぜ。あげてもいいけど。」と言い出すのである。もちろん半信半疑ながら、それでもカードが欲しいので僕達は彼を遊びに誘うことにした。で、僕達は彼に集合場所で会うなり「カードくれ」と要求する。彼は「オッケー、オッケー。ほら、このポケットに入れてきたんだから。」とポケットをまさぐる。が、無い。もう片方をまさぐる。無い。「あれ、確かに入れてきたんだけどな、無いな。盗まれたのかも。」とぬかす。僕達はマジギレである。

こんな感じで彼は嘘に嘘を重ね、遂にはクラス中からハブられることになった。すると、彼の母親が激怒、担任の先生に抗議、彼がみんなに「いじめられている」として学級問題になった。先生は彼をいじめるなど言う。が、子供であった僕達はまるで僕達が悪いというような先生のその口ぶりに納得がいけない。で、「いじめていない、彼が嘘をつくのが悪い。」と抗議する。今となってみれば、一歩間違えば「差別」問題と扱われかねなかった問題への対処を迫られた先生の苦勞が思いやられる。

他には、僕は母親がクリスチャンで幼い頃から教会に通っていたのだが、その教会にはダウン症の人とかも来ていて、僕はその人に気に入られて、ベロベロとキスされまくっていた。小さい頃も肉体的に男のおじさんからキスされるのは暑苦しくて嫌だなと思っていたが、大きくなってからは（中学生以降くらいかな）、それとはまた別に何となく嫌な感じがして、キスを拒んで、ハグだけにしてもらった。

後これは出来事ではなく、日常的なことだが、僕はブスな女を差別していないかと聞かれれば、していないとは言えないと思う。本人に直接「ブスは死ぬ」とか言ったりはしないが、ブスな女を見るとウツと胸焼けするような気持ちになるのは確かである。

以上は自分の実体験をできるだけ気持ちに正直に書いた。ここからは、僕が取材（という言い方はあまりしっくりこないが）した差別の現場のことを書いていこうと思う。

まずは、「芝浦と場」に見学に行った話。芝浦と場とは、品川にある食肉加工場、と蓄解体場である。これは部落差別問題の現場である。食肉加工に携わる人達が長年差別を受けてきたと言う問題である。職場で働く職員の方（部落解放同盟の方）に差別の歴史などの話を聞き、実際の解体現場を見学させてもらった。

僕個人としては、世代の問題なのか、そもそも部落というものを知らないために、部落を差別するという心情は元々全く無く、なので、部落差別についての実感というものがなかった。なのでその苛烈な差別の話を聞き、それ自体は「ひどい話だな」と思った。つまり、どうしても当事者意識が沸かないのである。現場を見ても汚らわしい仕事だなんて思わなかったし、職員の方々が言っていた「工場での作業」という表現が素直にしっくりと来た。生きている以上、飯を食い、それは他の命を殺すことである。当然の事なのだ。肉を食っている以上、それを汚らわしいと言う資格はないと僕も思った。

と、大筋では職員の方の話に納得したのだが、どうしてもしっくりこないところもあった。一つは、世の中には差別に対する「間違った考え方」が蔓延していて、「正しい考え方」に正していかなければ、という言い方であった。部落差別があること、それを解消すべきであること、には賛同できるが、僕はどうしても一つの「正しい」考え方があり、それに矯正すべきという意見には賛同できなかった。一方的に正しいことなんて無いし、色々な考え方がある中で、それぞれなんとか折り合いをつけながらやっていくしかないのではないかと思うのだ。

もう一つは、差別表現に関するところだ。職員の方は、「屠殺場」という言葉は差別的だから「と蓄場」と言わなければならないという。それには賛同できなかった。「知恵遅れ」や「つんぼ」が駄目で、「知的障害者」や「耳の不自由な方」が「正しい」のと同じ理論だ。あ、「障害者」の「害」が差別的だから「がい」にして「障がい者」にしなきゃいけないんだっけか。

と、こんなことをしていても何の解決にもならないと思うし、例えば「山谷」という地名を消し、「釜ヶ崎」という地名を「あいりん地区」に変えることは、問題の本質を隠し、無かったことにし、見ないようにしているに過ぎないと思うんだ。だから、差別表現を規制し、言葉狩りをし、上っ面をすげ替えることは、差別問題をより複雑にし、解決から遠ざけるだけだと思う。

もう一つの現場は新宿二丁目と本号に掲載したゆるカフェ。セクシャルマイノリティーの問題だね。僕が会ったセクシャルマイノリティーの人達は話しやすい、むしろ一般人といわれる人間達よりもよっぽど話の通じる人達が多かったような気がする。だから特に言うことも無い。

とまあ、色々書いてきたけれども、差別の現場を見てきて感じた印象というか、感じることは、現場自体は普通なのに、そこから一歩出ると、過剰な配慮というか、腫れ物に触る感じで、むしろ触らない感じで、表現に気を使ったり、こういう風に考えなくちゃいけないという様な勝手な決まりめいたものがあったり、すごく不自由なんだ。

・そんなこと言ったら、すべて差別だ。

ここで基本に立ち返ろうと思う。「差別」って何なんだ、と。基本的には「比べて、違うものを、違うと認識すること」

だと思う。で、世に言う「差別」というのは「その違うものを違うという理由で排斥すること」だと思う。で、この括弧付の「差別」は差別というよりは「差別的迫害」のことだよね。で、世間では差別とこの差別的迫害がごっちゃになっているんだと思う。

で、よく「差別はいけない」という標語的常套句があるけれども、あれは正確に言ったら「差別的迫害はいけない」だよね。で、これに対しては僕も異論はない。が、普通に考えれば、差別自体は必ず発生するものなんだよね。みんな

違うのだから、いけないもクソもない。人は必ず他人を差別せざるをへない。言ってしまうえば愛なんて究極の差別だ。

でも、世の中の人はそのころへんを分かっていない。特に日本人は、って本当はこんな言い方はしたくないんだけど、「みんな同じ」が大好きだから、出る杭を打つことに嗜虐的な喜びを感じる民族だから、この「差別はある」というところが分からないんだと思う。個性（笑）とかも差別だからね。

#### ・ やっとホーキング青山

ここまで書いてやっと本題の話に入れる。そう、この文章を書くことになったきっかけはホーキング青山さんの『差別をしよう』という本を読んだことだと書いた。

ホーキング青山さんは史上初の身体障害者芸人として活躍している人だそうだ。あの大川興行（江頭2：50、阿蘇山大噴火さん等が所属する）に所属していたこともある。

彼の著作はタイトルどおり、既存の差別に対する認識への違和感を表明し、「差別をしよう」と訴えかける本だ。そう「差別」ではなく差別だ。しっかりと意識して差別をすることで、「差別」、差別的迫害と戦っていこうというメッセージだと、僕は受け取った。詳しくは読んでもらいたいのだが、僕はこの本の主張に全面的に合意する。バカみたいな「みんな平等こそがいい」という意識や、言葉狩りをして「差別」から目を逸らす姿勢こそが、「差別」、差別的迫害を生み出しているのだと思うのだ。差別をしている自分を認識し、差別にまみれて初めて、「差別」と戦うことができるのだ。

#### ・ 差別の実践者たち

このパートはおまけみたいなもんなんだけど、僕の知っている（本を読んだことのある）人の中から、いま言った鍵括弧のない差別を、おそらくは自覚的に実践していると思われる人達を紹介したいと思う。

まずは、言わずとした天才AV監督、バクシーシ山下監督である。得意技である。彼の著書『セックス障害者たち』のまえがきから一部抜粋してみよう。

「被差別的状況に置かれることが好きなんです。ただそのためだけに、いまでもAVを撮り続けてると言ってもいいかも知れません。」

「僕が今まで撮ってきたAVは、ドヤ街のホームレスに男優をやらせたり、包茎のM男のチンポの皮をAVギャルに食わせたり、海外で小人を使って撮影したり。」

「ただ、今までの人生が平凡すぎたことが、今の作風と関係があるのかもしれない。何もトラウマがないからこそ、逆に、異常なものに憧れるところがあります。」

「そうやってAV業界に入って、初めて僕は他人に自分の話ができるようになりました。それまでの過去は、とりたてて喋ることでもなかったんです。

この業界に入って、後ろ指差される自分が嬉しかった。

そしてAV業界には、変態たちが、わざわざ差別されるために日夜あつまってくる。わざわざ人目に晒されにくるんです。

小便飲んだり、ウンコ食ったりだけが、変態じゃない。人前で堂々と股開いてセックスする女も変態なんです。AVに出るやつはすべてそうだと僕は思います。

そして僕は、憩いの場を提供するふりをして、彼らを見世物にしています。そして、そのことによつてまた差別されるのなら、僕はとても嬉しいです。」

一部といいながら、かなりの部分抜粋してしまったのだが、こうして改めて読んでみると、本当にすごい、言うまでもなく天才だ。さすがは我が心の師。いままで僕が四苦八苦して説明してきたことを、この短いまえがきですべて言い尽くしてくださっている。

そしてもう一人の実践者は特殊漫画家、根本敬さんである。彼の著作は漫画と文字の両方あるのだが、特に文字の方の著作は「市井の奇人・変人紹介」的な側面が強い。そして、彼曰く「因果系宇宙」の星の元に引き寄せられて集まってくるそれらの「いい感じ」の人達は、本当にぶっ飛んでいて、薄っぺらい平等なんて、ものの見事に破壊してくれる

。そう、根本氏は彼らを「差別」することなく差別し、尊敬し、観測し、本にしているのである。

# 第一回「このままじゃ終われない文学賞」 (企画説明)

---

第一回「このままじゃ終われない文学賞」



・ロゴデザイン：弦楽器イルカ

・企画趣旨

既存の物語の設定等を自由に変更し、自分好みに結末を書き換える（カヴァーする）企画。一つの課題作品に対して書き手数名と、選考委員を一人設定。選考委員の独断と偏見で一作品に大賞を授与する。

・企画概要

書く形式は小説、箇条書き、企画書風、エッセイ、俳句その他なんでもOK。設定の変更、枚数も自由。笑いでもシリアスでもとにかく自由。

・選考方法

書いた人の名前を伏せて選考委員に読んでもらう。

・第一回課題作品

M上H樹

『Nウェイの森』

・第一回選考委員

Grasshouse氏

・第一回作品投稿者

弦楽器イルカ、戸田環紀、オパーリン

とまあ、企画内容はこんな感じです。ここから応募作を掲載しますが、皆さんにも選考委員になったつもりで読んでいただきたいと考え、応募作の作者名を伏せて掲載してみました。応募作の作者名は結果発表のページで明らかにされます。それではKOW文学賞をお楽しみください。

# 応募作① 『Nウェイの森 プラトニック・ラブ編』

【第一回KOW文学賞 原稿】

・応募作①

## 『Nウェイの森 プラトニック・ラブ編』

『Nウェイの森』

設定：高校生当時の「僕」は、付き合っている彼女がいたが、彼女の貞操観念が固かったので、キスやベッティングまではできたが、セックスには至らなかった。結果、僕は「セックスをしてみたい」という若い自然な性欲を抑えきれず、何度か彼女にセックスを迫り、掴み合いのケンカをし、結局、大学入学で上京するときに別れてしまった。彼女のことを思い出すと「ひどいことをした」と後悔も多い。「次に初めてセックスするときは、好きな女性の同意を得て幸せなセックスがしたい」という思いを強くする。

以下、あらすじ：

・僕は、直子と偶然の出会いをする。

↓

・大学での生活。永沢さんに誘われ夜の街へついて行く。永沢さんが女の子を持ち帰り、自分も残りの女の子と一対一にされラブホテルへ行くが、結局セックスすることができず、ひどく気まずい思いをしてしまう。永沢さんに「お前の考えは固すぎる」と言われ、「永沢さんが柔らかすぎるんですよ」と答える僕。

↓

・直子とデートを重ね、彼女に惹かれ、真剣にセックスしたいと思う。

↓

・直子の二十歳の誕生日、セックスの機会がやってくる。直子の服を脱がせ、お互い裸になったあと、「君のことが好きだ。僕は初めてだけど、君とセックスしたいと強く思っている」と告げると、直子は自分も処女だと告白する。

↓

・直子はキズキとセックスしていると思込んでいたので、動揺する僕。自分がキズキよりも先に直子の処女を奪ってしまうことに混乱し、結果、勃起せず、セックスすることができない。「ごめん。こんなはずじゃ」と謝る僕に、「謝ることじゃないわ。いいのよ。でもどうして、こうになってしまうのかしら」とうつむく直子。

↓

・翌朝、起きない直子の肩を眺め、帰る。

↓

・落ち込む僕。そして、直子は療養生活に入り、しばらく会えなくなる。淋しさで他の女性と寝たいと思うが、やはり踏み留まる。悩みながら、あのとき直子とセックスできなかったのは、ありのままの彼女を受け入れられなかったからだと感じる。どうしてキズキと直子がセックスしなかったのかはわからないが、次に直子と会ったら、直子だけを見つめようと思う。そんな中、縁と出会い、交流を深める僕。

↓

・直子から手紙が来て、療養施設へ行き、直子やレイコさんと交流を深める僕。

直子から、「性的に濡れたのは、あの日だけだった」と告白される。キズキのことで動揺し、勃起しなかったことを謝罪する僕。「でも、これでよかったのかもしれない」と言う直子に、どういう意味か尋ねる僕。「大したことじゃないのよ。とにかく、いろんな問題がシンプルで公正になった気がするの。そういうものなのよ」と答える直子。それに対し、「君が言うその問題の中に、僕という存在は含まれているんだろうか。僕にとっては、君の問題は僕自身の問題だし、君にもそうであってほしいと願っているんだけど」と答える僕。



「ありがとう。傷つけたのならごめんなさい。ここでお礼を言うのが正しいかどうか分からないけれど、あなたが私に好意を抱いてくれているのは伝わるし、それがとても嬉しいのは本当よ。できることなら、ずっとこうしていたい」「僕もだよ」。手やフェラチオで、僕を射精に導いてくれる直子。

また別の機会には、雨の降る日にレイコさんが直子のいちばん好きな『ノルウェイの森』をギターで弾き、直子がリクエスト代としてまねき猫の形をした貯金箱に百円玉を入れる。そこで冗談を言い合いながら、「この三人で共同生活できたらきっと楽しい」「ワタナベ君のこと、ときどきレイコさんに貸してあげるわ」と言ったりもする。

↓

・大学へ戻り、緑とデートし、緑にも惹かれていく僕。二人の間で揺れ動く僕に、レイコさんから直子の病態が悪化した知らせが入る。僕は悩むが、一つの決断をしてレイコさんに以下のような手紙を書く。

↓

・「僕は今、直子と緑、どちらかを選ぶべき場所に辿り着いたのだと考えています。それはもちろん僕自身の問題であり、直子の病状とは直接の関係はありません。ただ、もしここでどちらかを選ばなかったとしたら、僕は将来必ず後悔すると思うし、なにより選ぶことで何かが変わり、直子が快方に向かってくれればいい、そう強く望んだ上での結論です。僕は今の直子を全力で取りに行こうと決めました。

キズキが、直子の半分をあちら側へ持ち去ってしまった。直子は損なわれ、それを修復するのはとても困難な作業かもしれませぬ。でも直子が自分自身を自己修復するために、僕は助けとなりたいたいのです。それは僕が、死んだキズキの代わりになるのではありません。今の直子がそばにいて僕を救われたし、僕自身の損なわれた部分を補う助けにもなった。だから僕も、直子にとってそういう存在になりたいということです。キズキのいないこの世界で、直子との新しい未来を夢見たいのです」

↓

・そして僕は、緑に電話をかける。

「君のことは好きだ。だからとても悩んだけど、僕にはもう一人、好きな人がいる。いろんな事情があつてその人とはうまくいかないかもしれないけど、その人との関係がダメになったから君を選ぶって選択はしたくないんだ。自分で未来を変えたい、その人との関係をうまくいかせたいから、君と付き合つてこれ以上関係を深めるべきじゃないと思う。謝ることじゃないから、君には今までありがとうって言うよ。さよなら」

「わかったわ。それじゃ。さよなら」

緑はそれだけ言うと乱暴に電話を切った。

僕は受話器を電話機に戻しながら、今どこから電話をかけているのだろう。まわりをぐるりと見まわした。いったいここはどこなんだ？ 見当もつかなかった。

でもここがどこかである必要はないのだ。どこでもないこの場所から、直子との新しい未来を生きるために、僕は電話ボックスを後にして力強く一歩を踏み出した。

↓

・直子が療養所へ戻って来て、レイコさんと話す。密かに自殺を決意し明るくなっている直子を見て、レイコさんは直子が快方に向かっていると勘違いする。そして思い切つてレイコさんが打ち明ける。

「ワタナベ君は緑にも惹かれていたが、直子を選び共に生きる決意をしたのだ」と。

↓

・直子の自殺が失敗する。吊っていた縄が途中でほどけてしまい、虫の報せで駆け付けたレイコさんがそれを発見し保護する。

↓

・直子は意識不明のまま、病院のベッドに横たわっている。僕はそのか細い手を握り、今生きていることを強く感じる。キズキは直子に向こう側へ連れて行けなかった。ここからは、僕が直子をこちら側へ連れ戻す番だ。

↓

・直子の意識が戻り、時を経て、北海道で三人の共同生活が始まる。以前、療養施設で冗談交じりに言っていた通りに、直子とレイコさんが交代で僕とセックスする、奇妙な関係が始まる。

↓

・我々は自分たちが歪んでいることを強く自覚しながら、その歪みと寄り添って生きていこうと決めた。そのために、

三人で共闘する生活が必要だったのだ。それぞれが仕事を見つけ、生活を少しずつ軌道に乗せながら、例え他人からはどれほど奇異に見えようとも、自分たちに最も適した環境を自らの手で選び取ることを強く意識して、日々を生きた。そうして、レイコさんが八十歳を過ぎて肺んで亡くなった後も、『ノルウェイの森』のレコードを聴く度、直子は重くなったまねき猫の貯金箱に百円玉を落とす。その音は、長い過去が澱のように積み重なって存在している今という瞬間に、とても温かく静かに響き続けている。

――以上。

## 応募作② 『それでも物語は終わらない、そして無数に始まっていく』

・ 応募作②

### 『それでも物語は終わらない、そして無数に始まっていく』

1. 初めに 一僕にとって一等特別なこの小説に、現時点での決着をつけるにあたって一

僕は今、何度開いたかわからない程に何度も、何度も開いたこの緑色の本を手にとって、後ろから開き、258ページを読み、あとがきを読んで、またそっと閉じ、そしてパソコンに向かっている。M上H樹著『Nウェイの森（下）』1987年12月25日発行の第7版。

最後に読んだのはいつだったっけか。ずいぶんと久しぶりの気がする。たぶんこの1、2年は読んでいない。でも、きつとなんの問題もない。忘れてしまっていた訳ではないのだ、忘れるはずもない。それくらい僕は何度も何度もこの小説を読んだ。という人は吐いて捨てるほどいるだろう。でも、なんの問題もない。誰が読んでいようと、なかろうと、関係ないのだ。この小説は僕にとって一等特別な小説なのだから。

好きな小説は沢山ある。よく「あなたにとって一番好きな小説はなに？」なんて聞く人がいるけれど、そんな野暮な質問はよして欲しい。決められるはずがない。だから、この小説が僕にとって一番好きな小説かどうかは決められない。無理やりに一番好きな小説を決めたとしたら、他の小説の名を挙げるかもしれない。僕は生きていて、本を読みながら生活しているから、一番「好きな」小説なんてその時々で変わると思う。でも、「あなたにとって一等特別な小説は」と聞かれたら、僕は迷わずにこの小説の名を挙げる。「好き」は変わるけど「特別」は変わりようがない。

『Nウェイの森』を最初に読んだのは14歳の時だった。文字通り寝食を忘れて没頭し、読み終わった時、僕の世界はひっくり返った。僕の世界はグチャグチャにかき回された。と言うよりは、それまで僕は存在していなかったのかもしれない。読み終わった時に「僕」は初めて「生まれた」のだと思う。僕にとって初めての「小説」だった。そして、今これを書いている僕と、その時に生まれた「僕」は、同じ「僕」だ。

誕生から十年間、僕がこの小説を繰り返し読み続けてきたのは、258ページと少なからぬ関係があるのだろうということには分かっていた。読み終わるたびに、僕はこの小説を「読み終わることができない」様な気分になった。この物語から抜け出せないような、そんな気分だった。モヤモヤとした気分だ。でも、不快なのか、苛立つのか、といえばそうではなく、むしろその逆で、なんとも言えない気持ちよさなのだった。だから、その感覚が癖になって、何度も読んでしまうのではないと思うのだ。この小説は僕にとって「終わらない」小説なのだ。

258ページの最後の一段落を引用する。

「僕は受話器を持ったまま顔を上げ、電話ボックスのまわりをぐるりと見回してみた。僕は今どこにいるのか？でもどこがどこなのか僕にはわからなかった。見当もつかなかった。いったいここはどこなんだ？僕の目にうつるのはいずこへともなく歩きすぎていく無数の人々の姿だけだった。僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。」

この終わり方はきっと必然なのだろう。これ以外にはない。分かっている。だから、僕が手を加えることはできない。でも、この場面の後もワタナベ君はこの小説の世界の中で生きていたはずだ。物語は終わっても、人生は続く、残酷なことに。小説を読み終えても、僕は、僕の人生は終わることがなく、続いている、残酷なことに。だから、僕は僕の人生の「その後」を生きなければならない。

だからこそ、僕はこの物語の「終わりの後」を書いてみようと思う。「終わり」を変えるのではなく、「つづき」を書くのだ。

2. 「終わり」の「つづき」

「ふう。」

読み終えて、パタン、と本を閉じた。どこにいるのか分からなくなっちゃったあの後、ワタナベ君は緑と会ったんだろうか。そして、セックスしたんだろうか。読み終えるたびにそう思った。今回もまた、そう思った。でも、読者の僕にはそれは分からない。書いてないんだもの。何となく、ハッピーな感じにはならなかったんだろうな、とは思う。飛行機の場面とかでも、月日が流れたのにずっと引きずってるしね。まあ、分からないんだけど。

僕がワタナベ君だったらどうしているだろうな、といつも思うんだけど、僕はワタナベ君じゃない。何で僕はワタナベ君じゃないんだろう、といつも悲しくなる。僕はワタナベ君でありたかった。ワタナベ君として直子を愛し、直子を失って、泣きじゃくりたかった。それでも狂おしいほどに緑を愛おしく思って、グッチャグッチャになって、何もできなくなって立ち止まりたかった。そう、立ち止まりたかった。そこで物語が終わりになってしまうみたいに、人生をお終いにしてしまいたかった。そしたら僕の人生はどんなに美しいことだろう、と思った。

でも僕はワタナベ君じゃない。僕は『Nウェイの森』を読み終えてベットに寝転んでいる「読者」だ。物語が終わっても、僕の人生は知らぬ顔で続いている。ドラマチックでもなんでもない僕の人生、ロマンチックでもなんでもない僕の人生、直子も緑もない僕の人生、チンケでみすばらしい僕の人生が続いている。それがいつも、僕の人生で一番の問題だ。

『Nウェイの森』を読み終えると、いつも僕はそんな風に自分の人生を恨めしく思っていた。初めて読んだ14歳の時から22歳くらいまでの間は。でも2年ぶりに読んだ今回は違った。いつもの様な絶望感に苛まれなかった。僕がワタナベ君ではないという現実を実感しても「うん、そうだ。僕はワタナベ君じゃない。」とだけ思った。そこにエモーションの乱れはなかった。つまり、開き直り、ある種諦めたのだ。それが良いことなのか、悪いことなのか、にわかには判断しかねるが、とにかくも変化である。僕にとって不変のストーリーであったはずのものが、そうではなくなったのである。いつ読んでも、どこから読んでも、変わらずに僕の胸を締め付けていた物語が、ついに変質したのである。

果たして、何が変わったのか。もちろん物語そのものは変わるはずもない、一字一句同じままで数多の人の本棚で再び開かれるのを待っている。だから、変わったとしたら、それ以外の部分、物語というという枠組みの外にある部分に変質したのであろう。物語の外には何かあるのだろうと考えると、大雑把に言えば、僕（読者）と社会の二つがある。

では社会は変わったのだろうか。それは、変わっている、目まぐるしく雪崩の様に。しかし、社会は止まることを知らず、常に物凄いスピードで移ろい続けている。目にも留まらぬ速さで。で、思うのだが、人々の意思とは何の関係もなく常に移ろい続けているこの社会、それはある種何にも変わっていないのと同じなのではないのか。変わり続けるものを「変わった、変わった」と騒いでみても仕方がないのではないのではないか、ということである。それならいっそその変化は「不変」のものとして考慮の外に追い出してしまった方がいいのではないのか、と思う。

ワタナベ君の生きた時代は60年代後半の日本であり学生運動の盛んであった時代である。そして、それが挫折した時代である。僕の生きる2012年はどんな時代かといえば、人によってまちまちであろうが、失われた20年、長き低迷に喘ぎ、とどめを刺すかのように地震や原発事故が起こって、それでもなお回復の兆し見えず、という時代であろうか。こんな風に、ワタナベ君の生きた時代と僕の生きている時代は全く違うけれど、ワタナベ君の抱えていた絶望と、僕の感じている無力感に、何ら本質的な違いがあろうか、ということである。そんなもの、違いはないのである。と、思うようになった僕の内面の変化、それこそが不変であったストーリーを変質させた張本人だったのではないだろうか、と僕は思うのである。

世界は何も変わらない。凡庸な若者に凡庸な絶望を植え付けるだけの存在だ。凡庸な誰しもがそうやって絶望し、世界に飲み込まれていく。そうやって消えていく数多くのストーリー、その一つに特別な輝きを見出すこと、そんなことに殊更意味はない。と世界は嘯き、僕らを宥めすかし、挫けたものから次々に飲み込んでいく。そうやって僕らは生きながらにしてムクロにされていく。

その圧倒的な事実の前に成す術のないワタナベ君の絶望、僕の疲弊、僕と彼の間は何ら差はないのだ。そう感じるようになって、僕は僕のストーリーをただ僕一人が愛でればいい、と開き直ったのだ。ストーリーとは死に方の詳細なんだと、そう思うようになったのだ。

つまるところ、僕は僕のストーリーを手前勝手に始めてしまったわけであり、その最初から自分がどこにいるのかなんて分からない。だから、ワタナベ君のストーリーがああいった終わり方をしたことは、至極当然の帰結だったのだろうと

思うのだ。だって、そうすることで、またあのストーリーは誰かのストーリーとして始まるのだから。そうやってストーリーは循環していくのだから。

## 応募作③ 『カンバセーション』

・応募作③

### 『カンバセーション』

「だって、ねえ、ワタナベくんたら、私の名前も知らないのよ」

姉の声は、私よりも少しばかり年上であるように聞こえた。

へんなの、と私は少し首を傾げた。

姿は私よりもずっと年下なのに。おそらくは、亡くなった時そのままの姿なのに。

声だけは成長をやめないのかしら、と思いつつも、私は少し身を乗り出した。

「でも、訊けるわけじゃないじゃない。自殺しちゃったお姉さんの名前は、なんて、ワタナベくんには訊けるはずじゃないじゃない」

私はワタナベくんを庇うつもりではなかったけれど（そんないやらしいこと私にはできない）、まるで名前を教えなかった自分が悪いと責められているように思えて、思わず声を強めてしまった。

姉は私とよく似た頬にえくぼを浮かべ、そして困ったように少し笑った。

「ねえ、違うのよ直子。どうして訊かなかったのかとか、どうして教えなかったのかとか、そんなことは問題じゃないの。私が言っているのは、ワタナベくんが私の名前を知らないという事実なのよ」

私は少し俯いた。久しぶりに会った姉は闊達な時の姉で、私は自信に満ち溢れたその瞳から、逃れるように目を逸らした。

「それは、まあ、本当だけれど」

姉の白い、どこか幼さを残す手が、私の視界に滑り込む。それは私の頬にかかり、ゆっくりと促すように上へと向かって持ち上げられた。

「前を向いて、直子。もう俯く必要なんかないんだわ」

「死んでしまったから？」

「そう、死んでしまってまで、どうして俯く必要があるの？」

「お姉ちゃんは、生きていた時にどうしてそう思えなかったの？ どうしてお姉ちゃんは死ぬ前に顔を上げることができなかったの？ どうして私にそんなことを言うの？ どうして『今』そんなことを思えるの？ 今そんなこと思ってた」

私がそこまで言うと、姉の手がふっと消えるように頬から離れた。私たち二人は向かい合って、白いすべすべとした床の上に座っていた。それは海の哺乳動物の皮膚のように、滑らかで柔らかく温かかった。

「仕方ない？」

私の言葉を続けたのは姉だった。

私は俯くこともできず、少しばかり目を細めて姉の黒々とした目を見返した。

そうよ、仕方ないわ。だって死んでしまったんだもの。

そう重ねて言えばよかったのかも知れない。けれど、その言葉が本当に自分のものであるのか、私には既に分からなくなっていた。ここでは時間の流れが緩やかな気がする。一秒が二秒になったり、吐息の流れが留まって見える気がする。気持ちさえ生まれる瞬間は穏やかで、去り際は霧のように掴むことができない。

「違うわ、直子」

ともう一度姉の言う声が聞こえた。

「死んでいるから、目の前にはいないから声をおおきくして言えることだってあるのよ。死んだ人間じゃなきゃ言えないことがあるのよ。ねえ、ワタナベくんの中で、私は名前さえないの。名前さえない私は、誰にだってなれるの。そう思わない？」

姉はどこか楽しそうに細い肩を揺らした。

「よく分からないわ。誰にだってなれる？」

ええ、と大人びた口調で、姉は今度こそはっきりとした笑顔を見せた。

「『私』は『あなた』かも知れないし、『あなた』は『私』かも知れないということよ」

「やっぱり分からないわ」

「ねえ直子、私が死んでしまった理由を知りたい？」

「知りたいわ」

「或いは直子、それは、『誰か』が『生きてしまった』理由でもあるのよ」

私は今度上を向いた。そこには床と同じ真っ白な空間が果てしなくどこまでも続いていた。或いは、と私は心の中で呟いた。

暫くそのままの状態でした私に、姉がとくとくといったように声を投げた。

「前を向いて、直子」

姉の言葉に驚いて、私は引かれるように前を向いた。

「上を向いては、いけないの？」

訝しげに問うと、姉は応えるように細い指先を顎にあてた。

「首が疲れるじゃない」

「え？」

「俯くのも後ろを向くのも、上を向きすぎるのだって不自然な体勢なのよ。疲れる前に、自然に前を向けばいいんだわ」

「お姉ちゃん」

「うん、そう。それだったのよね。つまりね、私はその自然というものを知らなかったの。知らなかったから、死んでしまったの」

「直子はよく覚えていないかも知れない。でも、私ひどかったのよ。感情の浮き沈みがね、これでもかっていうくらいひどかったの。調子のいい時はね、私本当に理性的な子供だった。好きな男の子だっていたし将来の夢だってあったわ。打ち込める趣味もあったしスポーツだって好きだった。友達だって多かったの。ねえ、どこにも落ち込む理由なんかなかったのよ。まあ、あえていうならあれね。ほら、うちってあんなだったじゃない。それがいつでも尽きない悩みの種ではあったわよね。でもね、本当の原因はそんなことじゃなかったの。それを見ないようにすることは幾らだってできたし、自分は幸せなんだって思える瞬間は探せば幾らでもあったのよ。私、本当に幸せになりたかったの。本当に幸せに生きたかったの。死にたくなんかなかったのよ。どうせ人なんかいつか皆死んじゃうんだから、わざわざ自分から死んじゃうなんて馬鹿らしいって、本当に私思ってたのよ。」

でもね、それがじわじわと崩れてゆく。ある時、自分でも気づかないうちにじわじわじわじわ中から崩れていってしまうの。気づいたところで無駄なの。自分でも止められないのよ。どうにもならないの。今度はね、自分が何なのか分からなくなっちゃうの。生きてるってことがよく分からなくなっちゃうの。そう思ったらもう駄目。何をやる気力もなくなって、空気の中の見えない穴みたいところにすうって吸われていっちゃう気がするのよ。その方が自然なことなんじゃないかって思っちゃったのね。生きていてごめんなさいって思うこともあったわ。苦しかったの。この世の中を自分の存在が少しでも占めているってことが苦しかったの。でも、塞ぎ込んでいるだけだったら誰も何も気づかなかったかも知れないわね。私ね、無気力じゃない時は何かを壊すことに一生懸命だったわ。特に自分が存在していた証一写真とか、何かの作品とか、手紙とか—そういうものが目に見えて残っているということが堪えられなかった。何故かなんて理由は分からなかったわ。ただ、それを壊したり燃やしたりすることで私はいつか安心することができたの。分かったの。どうしてあんなことしちゃったんだろうって、すぐに後悔するって私分かったの。でも止められなかったのよ。私だって止めたかったのに、どうすればいいか分からなかったのよ。」

でもね、そういう調子の悪い時は驚くくらいぱったり終わるの。そうしたら私、また馬鹿みたいに全部いちから作り上げるの。失っちゃったものを取り返すようにね。その時期は太陽の暖かさとかがすごく感じられて、生きることって素晴らしいって本心から思ってたのよ。だから頑張ったの。誰の為でもなく、私自分が幸せになる為にすごくすごく頑張ってたのよ。」

そしてね、また半月くらいするとぐずぐずぐずぐず崩れてゆく。の。

作り上げて崩れて、作り上げて崩れて、私延々とそういうことを繰り返してたの。

でもね、私はそれでも生きてたの。私、生きてたのよ、直子。

すごく自然だったのに。私、生きていただけだったのに。

おかしいなって最初に思ったのは周りだった。私、ずっと変わった子だって、扱いにくい子だって思われてたわ。ずっと『心に傷』があるって思われてたの。

やっぱりあれがいけなかったんじゃないかとか、無理をしてるんじゃないかとか、皆私のことを心配して何とか治そうと必死だった。わがままだって非難する人も中にはいたけど。勿論、死んでしまうほど苦しんでいるとは誰も思っていなかったわ。

どちらにせよそういうのが続くとね、自分は本当に欠陥だらけの出来損ないの人間なんじゃないかって思ってしまうのよ。調子のいい時は思考が働く分、もうどうでもいいやって投げ出せないで、冷静にそういうことを考えちゃうの。それでね、調子が悪いのは自分が悪いからなんだって、治さなきゃ治さなきゃって、脅迫観念みたいに思い詰めるようになってしまったのよ。

誰一人よ。誰一人。

私は悪くないって言ってくれた人はいなかったの。

悪いのは私の心だったのかも知れないし体だったのかも知れない。

でも、どちらにしてもそれは『私のせい』だったの。

私の思考だとか食生活だとか姿勢だとか環境だとか、私のどこかしらに原因があって、それが結果としてでているんだって誰も彼もが思ってたわ。

ねえ、直子。私ね、何人もの大人に人生を諭されたわ。

苦しいのは君だけじゃない。苦難を乗り越えて人は大きくなるんだ。人は独りじゃない。もっと大変な人は幾らでもいるんだ一。

当時はね、私それを真に受けてたの。だって子供だったんだもの。他人のせいにできないんだったら自分がいけないんだって自分を責めるしかないじゃない。でも、当然私はそんな言葉じゃ救われなかった。救われなくてしょ？ どうしてその言葉の中に救いがあるっていうのよ。

その時の私に何が必要だったか分かる？ 必要だったのはそんな抽象的なお説教じゃなかったのよ。

ただ一言でよかったの。一言、あなたPMSですねって医学的に診断してくれれば充分だったの。

あなたのせいじゃありません。ホルモンのせいですからって言ってくれれば、それだけで私楽になったのよ。たったそれだけのことで、ほんの少し楽になれたの。そしてそのほんの少しが人間を生きさせる場合だってあったのよ。

本当は私、下を向いて人生の意義なんか考えたくなかった。情緒なんかいらなかったの。深みなんかなくても、明るく強く生きたかったの。ああ、あなた、ホルモンコントロールできるはずないでしょうって、自然に逆らっちゃ駄目よって豪快に笑い飛ばして欲しかったのよ。どうしてみんな苦労しなければ駄目だって思うのかしら。眉間に皺寄せてたって何も解決しないのに、『そんな問題を抱えている私』があっけらかんと笑ってることを誰も許してくれなかった。皆、誰かの不幸と比べて自分の幸福を感じてるみたいだったわ。まるで、誰かが正しくある為に私を間違った存在にしたいみたいだった。

ねえ、誰かの人生の意義を深めるために私が不幸になる必要はどこにもなかったのよ

私は、足を崩してリラックスした様子の姉を見つめた。

「誰にも分かってもらえなかったの？ だから、それが淋しくて死んでしまったの？」

「違うわ」

「ならどうして」

「体が動いちゃったのよ。そういうふうには動く体を、私も誰も止めることができなかったの」

「まるで吸い込まれるみたいに」

「そう。まるで吸い込まれるみたいに」

私はためいきと思われぬように、薄く、けれど長い息をはいた。人が死んでしまった理由なんて本当は分からないのかも知れない。人が生きている理由が分からないのと同じように。

「お姉ちゃん、もうひとつだけ教えてくれる？」

私が言うと、姉は応えるようにゆっくりと瞬きをした。姉が瞬きをした瞬間、きらきらとした粉のようなものがその睫毛の隙間から零れ落ちた。



「さっき言ったわよね。これが、誰かが『生きてしまった』理由でもあるって」

「ええ」

「どういうこと？」

「理性では抑えられないものを抱えてる時が、人って一番生きていく気がするものよ。全てに分別をつけてしまって、死ぬ意義も見つけられずに亡羊と生き続けるのも辛いわ」

「蛇のなまごろしね」

「牙をぬかれた虎よ」

薄い唇の間から少しだけ歯を覗かせて、姉がくすくすと笑った。その笑い声も、細かな金の粒となってさらさらと空間の中に舞っていった。よくよく見れば、それは端から砕けつつあった細かな歯の欠片だった。

「お姉ちゃん、どうしたの。何だか……崩れているみたい」

「崩れているんじゃないの。こうして、空間とひとつになることが、今の私にとっては自然なことなの」

「お姉ちゃん、どうして。どこに行くの。お姉ちゃんはここからどこへ行ってしまうの」

「『誰か』の中に私はいるのかも知れないわ。『誰か』の代わりに死んでしまった私として、生き続ける『誰か』の中に私を見つけられるかも知れないわ」

「お姉ちゃん」

呼びながら、私は姉に向かって手を伸ばした。

伸ばした指の先が姉に触れた瞬間、姉は言葉通り細かに光りながら飛散して、そうしてまかれるように消えてしまった。

「待って、お姉ちゃん、待って」

私の声はゆっくりと空間の中に吸われていった。直子、と呼ぶ声が辛うじて聞こえたけれど、もはやその声は薄い膜を隔てているかのように、遠くからしか聞こえてはこなかった。

「なあにお姉ちゃん、よく聞こえないわ。お姉ちゃん」

もしかしたら、透明な膜に包まれているのはこっちなのかも知れない、と私は思った。

私はだんだんと身動きができなくなってきている自分を感じた。体を感じた。

へんなの、私にはまだ体があるのかしら。死んでしまったのに。

思う間にも、私の身は見えない膜に更にぎゅうぎゅうと締めつけられていった。もう声さえもうまくあげることができない。

ただ、私は塞がれた耳だけを注意深くそばだてて、姉の声を探していた。

瞬間、それまでくぐもっていた姉の声が、はっきりと膜の内側で響いた。

「ねえ直子。あなたは どうして死んでしまったの？」

声は、自分の体の中から発せられたように聞こえた。

—『誰か』の代わりに死んでしまった私として、生き続ける『誰か』の中に私を見つけられるかも知れないわ—。

本当は、私が生きていた間、姉は私の中に存在していたのかも知れない。

姉は、ずっと生きていたのかも知れない。

私はゆっくりと目を閉じていった。

吸い込まれてゆくような感覚の中、姉の問いに、私は返事をすることもできなかった。

「ワタナベくん」

覚醒は一瞬だった。

僕は目を開けて声のする方を追った。

「ワタナベくん？ どうしたの、寝てたの？」

緑がよくする、心配さを隠すための不機嫌そうな声が聞こえてくる。

僕は少し俯いて、片手を額にあてた。

腕時計を見るとここに座ってからまだ十分しか経っていない。

緑の到着が遅れていたらあの続きが見られたのに、と緑を責める気は起こらなかった。

緑が来るのがどれだけ遅れていようと、僕に続きを知ることはできなかつたらう。

「寝てないよ。……少し、たぶん、少し疲れていただけなんだ」

あれは、夢ではなかった。僕は眠ってなどいなかった。

緑を待ちながら、僕は成田空港の中のざわめきを見つめていた。

何もすることがない、どこへも行けない、ぼっかりと空いた時間だった。

行き交う人々や鳴り響く放送やカートが軋む音を見ていたら、突如、もうそこに直子はいないのだという思いが、むくむくと湧き起こってきたのだった。

それから僕は吸い込まれるように思考の一或いは空間の奥底に入ってしまった。

そうして気がついた時には、僕は、『直子』そのものになっていた。

そうだ、あれは、『直子』じゃなかった。

『直子』は『僕』だった。

なぜそう言い切れるかと言えば、『直子』が話していた相手が僕が名も知らない直子の姉だったからに尽きる。

本当の直子であれば、たぶん、おそらく、キズキと話していたことだろう。

そして、僕は本当は、直子の姉が話し相手でなくともよかったのだろう。

キズキでさえなければ、本当は『直子である僕』の話し相手は誰でもよかったのだ。

話し相手を『名のない』直子の姉にすることで、そんな身勝手を無意識のうちに僕はごまかそうとしていたのかも知れない。

それにしても、どうして僕は直子そのものになってしまったのか。

僕自身が直子になれば、直子が死んでしまった理由が分かるかとも思ったのだろうか。

そんなことがあるはずはないのに。

生きている時でさえ相手の気持ちを量ることは難しいのに、相手が死んでしまった後になって、それが簡単になることなどあるはずがない。

ただ、僕らは想像するだけだ。

あれは本当はこうだったのではないか。こうすればよかったんじゃないか。

こうすれば、今よりも幾らかはましだったんじゃないか、と。

結局、この旅行の初めから終わりまで僕はずっと直子のことを考えていた。

既に失われてしまった部分の多いこと、そして、直子のことを思い出そうとしなければ思い出せない自分を腹立たしく思いながら。

直子の姉ならこう言うのかも知れない。

ねえ、薄れていく記憶を、誰にも咎めることはできないのよ。朽ちてゆく体を、誰にも咎めることができないのと同じように。

僕にとって名のなかった直子の姉。その名を訊く誰をも、僕はもう持たない。

「緑。君のお父さんの名前は何だった？」

僕は額から手を外して緑を見上げた。

このままでは、僕はいつか『緑の父』と話す日が来るのではないかと思った。

緑の父と話したくなかったわけではなく、緑の父を自分のエゴに使いたくなかっただけだった。

やれやれ、といったように緑が僕の隣に座った。

「どうして今更そんなこと訊くの？」

「知りたいんだ」

「ふうん」

緑が目を眇めて僕の頬を見やるのが分かった。

「なんというか、その、あなたは怖いの？」

「何が」

「父親になることが」

「いや、そうじゃない。いや、そうなのかな」

「怖がりじゃない父親はいないわ」

「違うんだ。父親になることに不安がないとはいわない。ただ、今の質問は、そうだからじゃない」

「少なくとも、子供に名前を一字拝借しようなんて考えでお父さんの名を訊いたんじゃないってことね」

「そうだ」

うんざりとしたような緑の表情に、僕はほんの少し笑った。自然に笑うことができた。

ほんの少しが、人を生かすこともあるのだ。

「うん、でも、教えてあげない」

「どうして」

「いいじゃない。『緑のお父さん』。それでいいじゃない。あなたの思考の中でだけ誰かが生きてるわけじゃないわ。

私の父には確かに名前があったけれど、確かに最期の数日にあなたに会ったけれど、でもそれだけが父の人生じゃなかったもの。それに、名前を聞いてしまったら忘れることに罪悪感を覚えたり怯えたりするようになるわ。でも、『緑のお父さん』だったら絶対に忘れないでしょ」

「それはそうだけど」

「けど、何よ」

「僕はお父さんにきうりをあげたんだぜ」

僕が言うと、緑は一瞬呆気にとられたような顔をしたが、すぐに神妙そうに頷いて、なるほど、と小さく言った。

その返事に、僕はまたほんの少し笑った。

緑は、自分が正当であるが為に僕を間違った存在にしない。

笑う僕に、緑もつられたように口角を上げた。

「うん、でもまあ、良かったわ。近頃元気なかったし、ワタナベくんが、こんな自分を抱えたまま父親になれるのかとか、そんなしょうもないこと思ってるような気がしたから」

「思ったこともあるよ」

「あるの？」

「あるよ」

「でも今は思っていない」

「今は」

「どうして変わったの？」

「それも、自分に同情してることと同じだと思ったから」

緑は返事をしなかったが、相槌を打つように微かに頷いたかに見えた。

そうして暫くしてから、帰ろうか、と静かに言って立ち上がった。

「おうちに帰ろう、ワタナベくん。熱いお風呂に入って、熱いうどん食べて、あったかい布団で、ごろごろしよう」

海外から帰って来たばかりの僕が何を欲しているか、緑には分かっていた。僕が欲しているものを察してくれた緑に、今度は緑が欲しているものをあげるべきだと僕は思った。そしてそれはおそらく、今僕にできる唯一のことだ。

僕は立ち上がり、緑をゆっくりと引き寄せた。

緑は何よ、と言って少し恥ずかしそうに身動きをしたが、すぐに大人しくなって、僕の腰のあたりにそっとその両手を置いた。

抱きしめると、緑は緑の匂いがした。生きているのびのびとした匂いがした。

人が死んでしまう意味など分からない。生きている意味など分からない。

しかし、産まれてこようとしているものの意味を、僕らは疑ってはいけない。

重なり合った部分から緑の、そして誰かの鼓動が伝わってくる。その鼓動を聞いているうちに、空港のざわめきが次第に遠ざかっていった。

「僕もずっと、帰って来たかったんだ」

と僕は言った。

「帰って来られてよかったわね」

と、緑は軽く肩を竦め、照れくさそうに少し笑った。

—作品は以上です。次のページから結果発表が始まります。—  
Grasshouseさん、選考よろしくお願いたします。

## 結果発表

---

### 【結果発表】

選考は東京・築地「新痴楽」にて行われました

#### ■ このままじゃ終われない文学大賞

『カンバセーション』

執筆者 戸田環紀

正賞 金時計（イメージ）

副賞 500万パプー

#### ■ アイディア・技能賞

『Nウェイの森 プラトニック・ラブ編』

執筆者 弦楽器イルカ

正賞 銀時計（イメージ）

副賞 300万パプー

#### ■ おふらんす・えすぷり賞

『それでも物語は終わらない、そして無数に始まっていく』

執筆者 オパーリン

正賞 銀時計（イメージ）

副賞 300万パプー

## 【総評】

■『このままじゃ終われない文学賞』の第一回の選考ということで、大変な重責を担うことになった。一説には、文学のイグ・ノーベル賞ともいわれる本賞であるが、すでに報道等でご存知の通り、はじめに文学検察審査会の方からの申し出があり、「あの名作を、このまま終わらせてはいけない」という内部告発を受けての訴求手続きプロセスから始まる。これは、「文学に市民の視線を導入する」という文学改革の試みでもある。厳正なる審査の上に、不当に評価され過ぎた愚作や、冤罪の疑いのある作品、あるいは、どうしてもいいけどちょっとイジってみたい作品などが、訴求の対象となる。

今回、「KOW 071」として強制起訴を受けた該当作品は、M上H樹氏の『Nの森』である。ペッティングを描かせたら右に出るものがないと称賛される国際作家だけあって、やはりこの作品には、「ちょっとイジってみたい」と思わせる何かがひそんでいる。作品の選考過程において不透明だなどの意見も多々あるが、癒着と隠蔽は世の常である。また、今回は公平をきすため、マスコミ等の取材も、選考過程では一切お断りすることにした。

■なお、ネット上では、「KOW 071（このおわ）」の背景の文学検察審査会は、じつはアメリカ主導ではないとか、逆に中国側の工作があったのではないかな等の穿った見解もあるらしいが、そのような外部の政治的影響は決してないとか、ここにはっきりと断言しておく。「KOW 071」がいくら影響力の強い賞とはいえ、公道に多数のメン・イン・ブラックを配置したり、選考会場の築地「痴楽」上空に黒い軍用ヘリコプターを飛ばしたりするような当局の見え透いた妨害工作は、今後はやめていただきたい。これは国費の無駄遣いである。また、黒服サングラスの諸氏に言うておろが、いくらカワイイからといって、休憩時間に「KOW 071」のロゴTシャツを着たコンパニオン・ガールたちを路地裏でこっそり口説くのも、一切やめていただきたい。これは品位の問題のみならず、言論の自由・表現の自由の問題でもある。なお、文学検察審査会のメンバーは、石蕁金太郎、叢上虎、山田美妙美、島珠玉彦、笠木のぶ子、池田畷付の諸氏である。

## 〈幕間口上〉

■ えー、Grasshouseです。（おいおい、いままでの一人称は、誰だったんだよ。そうだなあ、岩机鉄太郎とかいう架空の私小説作家にしておきます。いかにも、頑固そうでしょ？ うざいでしょうが、このあと再登場させます）

『このままじゃ終われない文学賞』――。

じつは私も当初、「ラストの書き換え」「新たなオチ」の提案、ぐらいいに軽く考えていたのに、最初からみなさん、果敢にも沼地に入ってしまった。底知れない沼地に。沼地とは何か。つまりは、底のない「批評的創造」ですね。部分的な「上書き更新」という、限られた位置・角度からのシュートではなくて、360度全方位からの火炎放射攻撃、みたいな…。

与えられた文学空間を、どう理解するか、解釈するか。作品と、読み手として自分とのズレ、距離、そしてテキストの根本的な書き換え（新たなテーマの創出）など、ややこしい問題を、最初から出してきちゃったのね～。

いやいや、沼地にはまるのが悪いのではなくて、これは文芸ゲームなので、難問や隘路は、見て見ぬふりをすることも可能であるのに、見て見ぬふりをしないで、ずぼすぼと見事に入ってしまった。応募者は『このままじゃ終われない』という切り口を使って、二次創作の幅をハナからとびこして、なんだか作品のみならず、世界、あるいは世の通念に対して、「コノオワ精神」を、つきつけちゃった観がある。

うーむ、これ、どうするだべか……。

なるほどねえ。よおーく、よおーく考えてみると、『このままじゃ終われない』という言葉自体が、「critical=批評・危機・臨界」そのものではないかと、私も、はたと気がついた次第であります。

そっか。本企画の仕掛け人、恐るべし。

とはいえ、お題作品を元ネタとしさえるならば、オーケー、何でもあり、というのが唯一のお約束であるからには、「評価基準が存在しないというのが、唯一の基準」ということですね。

なんだか、『どんぐりと山猫』の、かねたいちろう君の評定みたいだが。

それでは、以下さっそく、個別訪問してみます。

## 【選評】

■いきなり、おもむろに、岩机鉄太郎に変わった。再登場である。チャネリングというやつである。最近純文学私小説作家も、スピ系が入るのである。すびけいすびけいと、ぱかにするなよ。自然主義リアリズムにスピが入ったら、どんな怖ろしいことになるか。いや、そんなことはどうでもよろしい。本題に入る。最終選考に残った3作は、やはり力作ぞろいであった。一時は苦渋のすえ3作同時受賞という考えも頭をよぎり、花袋先生の遺品である古蒲団の中で、悶々ともだえ苦しんだ。後日、文学検察審査会の面々と、懐石料理とプリンをつつきながら明け方まで検討したところ、時間ぎりぎりのところで、やはり一作に絞るべきだとの意見に傾いた。

ちなみに文学検察審査会のメンバーは、石藁金太郎、山田美妙美、叢上虎、島玉珠彦、池田畷付、宮田蛭、笠木のぶ子の諸氏である。

■以下、それぞれの作品についての評を報告してみたい。

### ・応募作①

『Nウェイの森 プラトニック・ラブ編』

執筆者 弦楽器イルカ

この作品は、いちばん正攻法で、原作に沿ったカタチで「書き換え」を行うことで、新たな風景を創出するという典型である。とくに「直子」の自殺が未遂に終わった場合、どういう展開となるかというあたりは、直球的なストーリーの「上書き更新」であった。自殺の紐が切れた、とのお間抜けなりアリズムがよい。作者の意図に添いながらも、まったくそれを小気味よく裏切る展開こそ、二次創作の醍醐味、つまりオマージュとイロニーが渾然となる「芸」だと思うのは、筆者だけであろうか。相手の刀を引き抜いて、そのまま突きつける戦場の美学である。「自殺未遂→3人の共同生活（両手に花のワタナベ）」。この一点を突破して、徹底的に追究したら、さらにスリリングで、はちゃめちやな展開になったのではないか。最後の貯金箱のコネタもいい。第一回目のKOWO71として、ストレートに「書き換え」を展開したところを評価する。結論としては、大賞は逃したものの、「アイデア・技能賞」ということになった。宮田蛭、石藁金太郎、山田美妙美の諸氏が強く押した。

### ・応募作②

『それでも物語は終わらない、そして無数に始まっていく』

執筆者 オパーリン

これは、原作の路線にまんまと乗ることを潔しとせず、「作品と、読者としての私」との関係を描いた作品である。島珠玉彦氏や池田畷付氏から、『Nウェイの森』をベースとして、自己のテキスト論を語った斬新な作、との高い評価があった。それに対して、石藁金太郎氏の「小説ではなく、評論のようだ」という、しごく健康的でスポーティな批判があった。それぞれの二次創作観の違いであろう。筆者のように、長年「病妻もの」「長屋苦労話もの」を書き続けてきた自然主義リアリズム系の作家には難解な作品であった。通常の創作とは角度を変えた点からの新たな視点を、どう見るか。これは評価の分かれるところであろう。両陣営は、そのうち険悪になり、伊勢海老を投げつけんばかりの状態になった。ついに、コノオワ文学振興会から派遣された190センチもある黒人レフリーの用心棒からタオルが投げ込まれ、強制終了とあいなった。

その後、島珠・池田両氏から、テキスト論賞ということで別枠をもうけてはどうかとの声があがった。フランスの高名な批評家にちなみ、ローラン・バトール賞を併設せよというのだ。両氏は、バトール教授の拠点であるモンサン・カルバドス大学にコネがあるそうだ。しかし、そんな格式ばった賞はダサイと、山田美妙美からの指摘があったため、私もよくわからないまま賛成した。結局「おふらんす・えすぶり賞」という大正詩人ふうのネーミングの賞に落ちついた次第である。

### ・応募作③

『カンパセーション』

執筆者 戸田環紀

本作品も、作者のテーマのさらなる展開や、路線の踏み外しよりも、そこから一步距離を置くマイクロコスモスを作った作品である。「上書き更新」ではなく、別のところに「内的リンク」を張って密通するわけである。その世界には「

直子」の分身ともいえる「姉」がいる。『カンパセーション』では、原作の喪失感を別の形で拡大してみせ、内的自己ともいえる「姉」との会話を通じて、死の誘惑と生きる意義の希薄を浮き彫りにする。しかし、それは結局のところ、ワタナベの内面のドラマであり、自己とは何か、他者とは何かという存在論にまで迫る。これは「自殺・喪失・セックス」を描く原作では踏み込んでいないテーマだ。

さて、これをどうとらえるべきか。

叢上虎氏、石藁氏、宮田螢氏が、原作にない新たな主題そのものを盛り込むことに対して躊躇する発言があった。島珠玉彦氏と池田罌付氏が、これに強く反論するカタチとなった。さらに、笠木のぶ子氏からは、二次創作ではなく、この主題を軸としたオリジナル作品として再構築するのがよいのではないかとの「もったいない」発言もあった。

この辺りから、原作・二次創作を超えてあらためて議論すべしとの主張も出てきた。ここを追究していくと、「書き換え」にとどまらず、M上H樹とは何者か？が、見えてくるかも知れない。

議論が紛糾していたところ、とつじよ「今まで銀座で飲んでいて」として、なぜか途中乱入してきた新井諭吉氏が、この作品の繊細な思索と存在論がよいと強く押した。そして「みだらにして透明な死臭」という、わけのわからんことを言い出した。この人は、「みだら」という言葉が何故か好きなのである。それはともかく、作品に投入されたエネルギー、思索、構築力などを総合し、全体の作品の存在感を比較し、もう一度、再検討する流れとなった。こうした選考プロセスによって、本作品が、第一回の大賞にふさわしいとの見解に、落ちついていった次第である。

## 【祝辞と花束贈呈】

これは全くの偶然であるが、世界的文豪にしてノーベル文学賞受賞者のガルシア・マルケ・ボルケス氏が講演旅行のために来日しており、宿泊先のホテル・オークラからの貴重な音声コメントを戴いた。

「私は若き日よりレディ・ムラサキ、タニザキ、ミシマ、アカガワジロウ、カワサキチョータローなどの日本文学を愛読してきました。いま、世界はまさに、このままでは終われない状態であります。つまり、人類史という物語の大いなる書き換えが始まっています。尊敬すべき日本文学の発展のために、この文化的試みが多大な貢献をすることを願ってやみません。García Márque Borques」

ご高齢の文豪からの祝辞をいただくにあたって、ボルケス氏の長年の秘書にして愛人の噂もあるネタキリーヌ・シエスターナ女史にご尽力いただいたことを、ここに謹んで謝しておきたい。南米産ラフレシアの献花をいただいた。

※ なお、賞金のパブー (pabuuuu) なる通貨単位であるが、これはドル・ユーロが破綻した後に発行される国際通貨のひとつのこと。現時点では、いつから流通するのか判然としない。まあ、「気持として、取っってくださいナ…」という、アレである。

で、あるからにして、300万キモー、とか500万キモチイ、とかの通貨単位でもよいのである。いずれにせよ、そういった矮小な枠にこだわらない優雅さこそが、精神の貴族にして高等遊民たる「コノオワ精神」というものであろう。

(BGM♪) Norwegian Wood

えー、Grasshouseです。

……という結果に、あいになりました。

いま読み返したら、この評文、あることないこと、闇鍋みたいで、くどいなア。

第一回のお祭りとはいえ、ちと、やりすぎですかね。

まあ、書いてしまったものは、仕方がない。

紙媒体の編集の際には、テキトーに、ばさばさ伐採してください。

さて、最後にひとつだけ。

このイベントにお呼ばれされて、あわててM上H樹を再読いたしました。

頑固な純文学作家・岩机鉄太郎氏がいつているごとく「ここを追究していくと、書き換えに留まらず、M上H樹とは何者か？が、見えてくるかも知れない。」

つまり、解釈・批評になってしまいますね。



どうして、彼だけが日本の作家であれほど世界的に読まれているのか。

その辺の秘密を、ちょっと私も、考えてみました。

古くさ～い同人誌の世界では

「あんなのはね、通俗だから受けるんだよ」

「文章に、細部がないだろ。味わい深い、文学的な細部が」

「じゃ読んだんですか？」

「キミい、あんなの一ページも読むに値しないよ。しょせん、エンターテインメントだろ」

という、不毛な会話がいまだに交わされています。 まあ、嫉妬も相当あるでしょうね。「純文学じゃないから、売れる」という理屈に閉じこもるしかない。

それはともかく、結局、彼はタナトスの作家なのではないかと思います。

そのタナトスの負の魅力、理由なき死への暗い誘惑が、いま、日本のみならず、世界的な情動として、普遍的に広がってきており、ずるずると死の方向へと傾斜してゆく。

半透明グレーの色に沈んだ集合意識、読書内安楽死、フェイクな涅槃の魅力。

そういった喪失感と叙情性が、M上H樹的な磁場・意識ゾーンを形成しているように思います。

もちろん、書き言葉の魔術で、こういうことが出来ることは、それじたい凄いことです。集合意識から立ちのぼる叙情、いわば「歌」になっているのでしょう。

そういえば、初期の作品に、自殺した「鼠」というのがいましたな。アレが、曲者ですね。彼がどうも、あっちの世界から、おいでおいでをしているような。M上ワールドの人物は、闇に吸い込まれるように、理由なき自殺を遂げてゆく。

日本の「COOL」で「カワイイ」表層文化の背後に、どんよりと沈潜している「死への傾斜」を、彼の文学は浮上させ、表象化している。秋元的躁状態と、M上の憂愁は、背中合わせなのか。

恋人や友人の理由なき自殺と、この世に置いてきぼりにされた者たちの孤独と喪失感のドラマ。その淋しさ、寂寥感が、小説空間のトーンとなり、これを世界中の読者が、いま共有している。これは静かなレミングの破滅衝動のようで、ある意味ではヤバイことです。

しかしながら、過去、多くの自殺作家を出した日本文学史そのものが、タナトスの文学以外のなにものでもないことに想いをはせれば、フィッツジェラルドだの、サリンジャーだの、F・ロスだの、いっけん軽快なアメリカ小説、都市小説の装いをしたM上H樹の文学とは、じつは……や、……の、まぎれもない嫡子…。

この辺で、いい加減に、やめときます（笑）。

そういった文脈では、今回の受賞作『カンバセーション』は、「直子」「姉」の対話を通して、この暗いエネルギーの流れと、直接、向かい合っていると思いました。

しかしこの作品は、すでに「書き換え」ではなく、創造でしょうね。

というわけで、このあたりを結論とし、「このままで、終わり」にしちゃいます。

皆様、おめでとうございます。

再読の機会を与您にいただきまして、ありがとうございました。

どうも～、

お疲れさま、でした～。

(♪ BGM ) Norwegian wood

And when I awoke, I was alone  
This bird had flown  
So I lit a fire  
Isn't it good, Norwegian wood

## 「受賞のことば」 戸田環紀、弦楽器イルカ、オパーリン

### 【受賞のことば】

#### ・このままじゃ終われない文学大賞

##### 受賞者 戸田環紀

この度は栄えある第一回このままじゃ終われない文学大賞を頂き、誠にありがとうございます。心より光栄に思っております。まず、多大なるご尽力により選考して下さいましたGrasshouse様、企画にお声がけ下さいました弦楽器イルカ様、「月オパ」編集責任者でありますオパーリン様、並びに作品をお読み下さいました全ての方に、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

皆様ご承知の通り、「カンバセーション」は作家M上H樹氏の「Nウェイの森」をベースとして書かれました二次創作作品であります。私はこの作品を主に二つの観点により書き始めました。

一つ目に、「カンバセーション」の中の「直子の姉」はほぼ私自身だということであります。今になって漸く自分の体との付き合い方も覚えました。思春期の頃は本当に辛かったのを覚えています。もしかしたら同じような悩みを抱えて、追われるように自分を責め続けている方もいるのではないかと思い、原作の中で最も共感しました直子の姉の口を借りて、今回「記念碑的」な思いで過去のことを書いてみました。

二つ目に、私が初めて「Nウェイの森」のDVDを見たのが昨年末であり、それに対し激しい怒りを覚えたということが執筆に大きく関係しています。

私はM上H樹氏の小説の根底にあるのは諸行無常感であると思っています。そこから単なる喪失への嘆きではなく、「それでも生きていく」ことへの静かな覚悟、限られた生の、ほのかな澄んだ輝きを感じます。だからこそ、どこにも「再生」をおかず、「死」のみをフランス的趣向である「狂気的な美」へと昇華させようとした監督の試みは、私には原作も読者をも無視した、全く監督のエゴにしか思えませんでした。

しかし、暫くしてから怒りを客観視した時に、「芸術という他者を傷つけるつもりではない手段、行為によって激しく損なわれる人間がいるのだ」という事実には私は当事者として慄きました。M上H樹氏によって培われてきた自覚のある私は、いつしか「私のM上H樹」と「他者のM上H樹」の間に溝を作り、更には自分の認識以外は受け付けられない狭量さをも身につけていたのでしょうか。

私を含め、読者とは我を持つひとりの人間であります。小説に対する思いは、ひとそれぞれで計り知ることができません。

表現は自由です。しかし、表現の先には必ず人がいるのだということを表現者は忘れてはいけません。小説を原作として映像化をしようとする者は、ゆめゆめ気をつけなければいけません。

そんなことを思っていた矢先、弦楽器イルカ様より今回のお話を頂きました。

「Nウェイの森」を扱い、映像化ではないものの、今度は自分が創作をする側に回るのだということが、私には満を持して与えられたひとつの峠に思えて仕方ありませんでした。

作家にできることはひとつしかありません。読者の方の心に、体に、生活に波動を投げかけることだけです。僭越ながら、この「カンバセーション」を読んで、憤りや不満を含め、何かしら心の動きを感じられたのなら、何故そのような思いに至ったのかに思いを馳せて頂ければ嬉しく思います。そして、自身がどれだけその小説（原作）に深く浸されているのかを改めて感じるきっかけになるのなら、私がこの小説を書いた意味もあるのではあるかと思えます。

最後に、こういった場が与えられたことへの奇縁に感謝して、私の受賞のことばとさせていただきます。本当にありがとうございました。

#### ・アイディア・技能賞

##### 受賞者 弦楽器イルカ

この度はこのような賞をいただき、誠にありがとうございました。

今回応募した作品は（個人的な話で恐縮ですが）、私が書いた童貞三部作の番外編という位置づけで、もしも「僕」

が童貞だったという仮定の下（「選び取る」という自作のキーワードも使いまわし）、できるだけ人が亡くならない方向でカバーしたい、というコンセプトで作成しました。

結果、もしも「僕」が童貞だった場合、縁より先に恋愛感情を抱いた直子に対する欲求と執着が強くなって（お互いに初めてであるという事実が、僕にとって少なからず運命的でヒロイズムな恋愛感情へと発展し）、直子を選び取るという選択があり得たのではないか。そしてその選択が直子へ伝えていけば、直子の決断に（一筋の光の様な）迷いが生じ、結果として紐が緩んでしまうような失敗の可能性もあったのではないか（だったらいいのに）。ただ直子の自殺を決定的に防ぐには三人で支え合うしかないかな、という結論に（私の中では）自然と辿り着きました。

はじめ、課題作品に『Nウェイの森』が挙がった時は、「畏れ多い。蛇足にもほどがある」と思いましたが、考え始めると思いの他するすると、楽しくカバーできました。

また、カバーして改めて気づきましたが、『Nウェイの森』は「作家である作者＝僕」という実話的な側面抜きには語れない作品であり、北海道で共同生活することは牧歌的ではあるが現実から遠く、結局、直子が死んだ世界で作家をしている作者が今どこにいるのか、自問自答を描いた作品なのだろう、と感じました。

そういった意味で、原作を単純なフィクションに落とし込んだ（貶めてしまった）私の作品は、実話的なリアリティの欠如という弱点から大賞を逃したのだろうと自己分析しつつも、ただ個人的にはものすごい満足感のある仕上がりとになりました。

また、他のお二方の応募作品を読んだ時、全く別角度からのアプローチに驚くと共に、そのバラバラさ加減が非常に作家的で良い、と思いました。

最後に企画立案者の一人として、この試みは原作の冒涇を意図するものでなく、原作を愛するが故、自己と作品との創造的距離を測るべくして企画されたものであると言及（釈明）し、受賞のことばと致します。なお、読者もこの企画の参加者の一人です。ご参加いただき、誠にありがとうございました。更に今回の読者の中から、今後少しでも応募作家が増えることを期待致します。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

## ・おふらんす・えすぷり賞

### 受賞者 オパーリン

小説に限らず、何かしらの文章を書いて、それを自分以外の人間が読んでくれる。読んでくれただけでなく、賞までいただける。とんでもなく冥利に尽きる出来事でありました。

実際問題、文章を書いて賞を頂いたのは人生初の出来事であります。あな、うれし。Grasshouseさん、どうもありがとうございました。

選評を読ませて頂いたところ、「これは小説なのかどうか」というところにおいて選考委員の方々の間で意見が割れ、気論が起ったということだった。きっと彼らはGrasshouseさんの脳内であーだ、こーだとワッチャカやっていたのだろう。その様子を想像すると楽しい。

僕自身、この文章（あえて小説とは言まい）を書きながら、「小説って何なんだろうな」と考えていた。そして、結局はよく分からなかった。僕は事あるごとに「分らん、分らん」とバカの一つ覚えみたいに連発しているのだが、考えてみれば、僕には「よく分っていること」なんて何一つ無い。何も分らん。

で、「分らん、分らん」と考えているうちに、急に地面が消えうせて、上も下も無い様な、そんな空虚で真っ暗な空間に放り出されたような気になる。自分がどこにいるのか、分らんくなる。怖い。

と、そんな状態にしよっちゅう陥る。で、僕のこの「自己喪失病」はいつから始まったのかと考えると、やはり14歳の時に『Nウェイの森』のあのラストを読んでしまったことから始まっている。

だから、この小説を書き換えようと思ったとき、やはりあんな風にしか出来なかった。一文字一文字を書き付ける度に、他の文字が書かれたかもしれないという可能性が削られていき、結局はあんな風な小説が出来上がった。あらゆる可能性があったのに、僕はあの一通りを選び取った。

執筆に限らず、僕はこれからもそうやって、唯一つの選択肢を選び、あるいは選ばされ続けて、その他の選ばれるかもしれない選択肢を葬り去り続けて行くんだと思う。

で、この小説を書いていた時のその選択の連続の結果に、あるいはその切捨での連続の結果に、この様な賞を与えてくださったGrasshouseさんに今一度「ありがとうございました」を言いたい。



### ・「だるまさんが転んだ」

執筆者 東町健太

先日、仕事を終えて帰宅する途中のこと、通りがかった公園で小学校低学年くらいの子供がわらわら群れて騒がしくしていた。最近は少子化の影響なのか、外で遊んでいる子供を見ない気がする。見かけても公園のベンチとかに座り込んでゲームやらカードかなんかで遊んでいたりする。かくいう僕も小さいころは外で元気に走り回る系の子供ではなく、むしろそうやって外にでてなんの思慮も分別も持たずにまさにアホな雰囲気を出して動物のように意味もなく走り回って転げまわって爆笑している同級生を見るたびに、「…哀れなやつらよ」などと蔑み、哀れんだりしていた。そんなことを懐かしく懐古しながら、公園でなにやらわあわあやってる子供らを見つめていた。最近の子供って何して遊んでんだろな？という他愛もない興味を覚えたからだ。

彼らが群れてしていた遊びは「だるまさんが転んだ」だった。昨今、いろいろな言葉が「差別を助長」だとかなんだとかわかったようなわからないようなイチャモンをつけられてなくなっているというのに、彼ら子供たちはそんな風潮にめげずにがんばっていた。言うまでもないが「だるまさん」は差別用語として言葉狩りの憂き目にあった言葉である。「だるま」は手や足がない人を侮蔑している言葉であり、そういった人たちの心情を慮って使わないことにしようよ、という理屈で狩られた言葉だ。しかし子供たちは輝く太陽のような笑顔でその差別用語を叫び楽しんでいた。「だるまさんが転んだあっ！！」ロックンロールだ、と思った。子供というのはえてして残酷である、といわれる。というのは、「他人の身になって考える」という、冷静に考えれば絶対に不可能な教訓に毒されていないからだ。だから自分がおもしろければいい。手も足もない障害をもつ人間を転ばせて転がして見下す。そりゃあ面白いに決まっている。人間なんて結局差別が大好きで、他人のことなんて本当はどうでもいい生き物なのだってのは子供はみんなわかっている。こんなガキでもわかることを理解してない大人が差別撤廃とかさけんでもそれは無理な話で、まず自分たちは差別とかが大好きで人を見下したくてしょうがない存在であることを認めないと絶対に話は前にすすまないし、認めたらうで、じゃあどうしよっか、って話になんか絶対にも解決しない。自分の姿が見えてないからこそ、言葉狩りみたいな馬鹿なことをしだすやつがあらわれる。しかも結構大量に。言葉なくしても本質的に何も解決しねえだけだな。

まあ何を言いたいかって言うと、人は自分の姿がよく見えないってことです。見えないからこそ、他人からみたら的外れで滑稽なことも真剣にやっちゃう。去年の年末だったと思うけど、上野駅の近くで頭が悪い人みたいな感じで僕が信号が青に変わるのをぼよぼよ待っていたときのこと。見知らぬオヤジに声をかけられた。

「中越地震の被災者への募金おねがいます。」

いやいや、中越地震っていつだよ。東日本のほうが先だろ。馬鹿か。とまあそんなことを瞬間的に思ってそのオヤジを見てみたらまあとにかく小汚い。よれよれのジャンパー、ぼさぼさの髪、ひげもだらしく伸びてるし、なにより息が臭い。なんだこいつは、と心から思った。ふと周りを見渡すとそのオヤジとおんなじ用に募金をつのってるやつらが何人かいて、そいつらがまたそろいもそろって「俺、もう終わったし」みたいなオーラをまとっている。おばさんもいたけど、そいつだって人目見ただけでわかるくらい余計な苦勞ばかりして生きてきたやつの人相してて、生まれた瞬間すでにおばさんだったんじゃないか、こいつに少女時代なんてなかったんじゃないかと思ってしまうほどだった。小汚かったし。そんな小汚いやつらが中越地震の被災者のために募金活動をしていた。やってることは正しいけど、それは違うだろうと思った。中越とかまずおいとお前らは先に自分自身を救えって。ぱっと見、乞食にしか見えねえじゃねえか。てゆうかはつきり言ってお前ら乞食だろ。彼らなんか自分自身が見えていない典型であると思う。

路上で怪しげなアンケートを行ってわけのわからない宗教に勧誘しようとしてるやつらもまあ自分が見えていない。見えていない、というか「俺の信じてる教祖様は最強で、ほかの宗教なんて全部ごみだってことを広めてる自分」はすばらしい行為をしてるすばらしい人間だと思いついで。他人からみりゃ、馬鹿そのものなのに。あれはなんだろ、統一協会かな。僕は何度も彼らのアンケートにつきあってあげたことがある。ついこないだのときはとりあえず「年収二千万円の外科医兼DJ。趣味は盗撮と野鳥観察で敬虔なモルモン教徒。今はカンボジアに学校を作るために消費者金融で金を借りてきた帰り」という設定の人物としてアンケートに協力した。アンケートを書いてくれと頼んできたのは三十台

後半くらいの男性だったが、僕の書いたアンケートをみて怒り始めた。いわく「私たちはまじめにやっているんだからまじめに協力してほしい。こんな怪しい人間に頼まなければよかった。時間を損した。」みたいなことをいっていた。お前らがまじめだからってなんで俺までまじめにやんなきゃなんねえんだ。俺に怪しいってお前らが言えた義理じゃねえだろう。お前らなんか怪しさの頂点じゃねえか。わけわかんない教祖様に貢いでんじゃねえよ。今のお前のやってること親が知ったらもう号泣必至だろ。おたくの息子さん、わけわかんない宗教で洗脳されて目イっちゃって路上でアンケートとかやっちゃってますよって言ってやりたいよ。時間損してんのはこっちだ馬鹿野郎。こいつもかなり自分のことが見えていない人間だと思う。

まあいろいろ極端な例ばかり書いてきたけど、こいつらに共通するのは「自分のしてることは正しい」って思い込めることね。冷静にみりゃあこいつらは乞食だったり気違いだったりするだけなんだけど本人はそんなこと露ほどもおもっちゃいない。自分の正しさしかみえなくなってる、まさか自分がだめな人間だなんてどこに思考が及ばなくなっちゃってるんだね。別にだめでも乞食でも気違いでもいいんだから、まずちゃんと自分を見ろって。どうせみんな一緒だよ。誰だってだめな点なんて腐るほどあって正しいとこなんてほとんどないんだから。ちゃんと自分がだめで乞食で気違いだっことを逃げないで認めて受け入れなきゃ。そっから、じゃあどうすんの？って考えてプロセスを組み立てていくことから逃げたやつらが世の中多すぎていやになりますです。

あああ、だるまさん転ばせたいっ！！

### 「世界が廻り過ぎることへの危惧」

執筆者 オパーリン

いつだったかな、ちょっと前、田原総一郎が司会をしている「朝生」という番組を見ていた。その回は「激論！絶望の国の若者の幸福と夢」というテーマだった。古市憲寿さんの『絶望の国の幸福な若者達』を下敷きにして議論をするという回で、年寄のパネリスト達は古市さんを「お前はこの本書いて何が言いたかったの？分からん！」みたいな感じでディスリ、古市さんは「言いたいことは別にありません。ただ事実を書いただけ。」みたいな感じでそれに応じていた。荻上チキさんは「じゃあ君は何もしゃべんな。」と古市さんの冷めた感じにキレていた。ステーキ屋さんの井戸実さんは相変わらず「税金払ってない貧乏人は黙ってろ！」みたいな感じ、東浩紀さんは議論のあまりのレベルの低さにうんざりしている様子であった。

とまあ、番組自体はいつも通りのカオスな感じだったんだけど、今回僕が書きたいのはこの番組自体のことではない。

議論の途中で話が「若者」から「官僚のゴミ加減」に移っていた。みんな、どうしたらゴミな官僚共を駆除できるかについて話していた。その時、チームラボ代表取締役の猪子寿之さんが非常に面白い発言をした。今回のこの文章のメインテーマはこの猪子発言についてである。

と、その前に少し猪子さんについて紹介しようか。猪子寿之さんはチームラボというWeb系のベンチャー企業（詳しく何しているかは知らん）の代表取締役で、最近では週刊プレイボーイで元2チャンネルの管理人のひろゆき氏と連載を持ったりしている。この連載自体はひろゆき氏とホリエモン氏がやっていたのだが、ホリエモン氏が捕まったので代わりに猪子さんがやることになったっぽい。で、何で朝生に出ているのかはよく分からないんだけど、チョコチョコ出っていて、毎回ぶっ飛び発言をして笑わせてくれる。東浩紀氏とも仲がいいみたいだ。

で、問題の猪子発言を紹介しよう。録画していた訳ではないので、僕の記憶であるが、彼は「官僚とかって、実は出来るだけゴミみたいな人がやった方がいいんじゃないかなって思うんですよ。」と言った。その瞬間、残りのパネラーはみんな哑然、「この人、何言っているんだろうか」って感じだった。で、みんなが我に返り、口々に反論を述べだして、またいつものカオス状態に。で、田原さんがみんなをなだめて猪子さんにその根拠を聞く。ちなみに田原さんは猪子さんのことを買っているのだから、事あるごとに猪子さんに話を振るのだ。

で、猪子さんは「えーっとね、なんでかって言うとき、官僚の人達が優秀だとさ、システムが回り過ぎちゃうと思うんですよ。」的なことを言っていた。が、またもやパネラー達が「意味不明！」みたいな感じで騒ぎ出し、結局この話は流れてしまった。ステーキの井戸さんとかは完全に猪子さんのことを侮蔑・嘲笑している感じであった。

とまあ、猪子発言の概要はこんな感じである。番組内では鼻であしらわれて終わってしまったのであるが、僕はこの発言が何だかとても気になった。ただのとんでもない発言ではなくて、実はとても重要なことを言っているのではないかと、そう思った。でも、その発言の真意は僕にも分からない。いや、何となく分かるような気もするんだけど、上手く言葉に出来ないような、そんな感じ。

その後も、この謎は解決することなく、時々ふっと思い出されて、モヤモヤする。みたいな感じが何度もあつてずっと気になっていた。その真意を知りたくて、プレイボーイでのひろゆき氏との対談を読んだりもしたんだけど、やっぱり分かったような分からないような。

が、それがだね、こないだふとした拍子に繋がったんだよ。「分かった」なんて言っちゃうのははばかれるんだけど、ある作家が「おそらくは似たようなこと」を書いている文章を見つけたんだ。いや、正確に言えば思い出したんだ。

それはわが心の師、色川武大の著作『うらおもて人生録』の「向上しながら滅びる一の章」、「一步後退、二歩前進一の章」に書いてあった。これらの章では途中ストリップと映画を比較したりしながら、物事の進歩と終わり（色川氏はワンサイクルという言葉を使っている）、そんな中で物事が持続する秘訣について書かれている。

少し詳しく紹介しよう。色川氏は

「ええと、あのねえ、こういうことがあるんだ。物事というものは、進歩、変革、そういうことが原因して、破滅に達するんだ。」

と書き始める。次に、

「たとえば、誰かが、僕たちの生活が一変するようなものすごい発明をしたとするね。あ、人類にとって大きなプラスだ、科学の勝利だ、それはそのとおりなんだけれども、この勝利によって、その分だけ確実に、終末に近づいてもいるんだ。」と続ける。そして、

「ちょうど、年をとると死ぬから、年はとりたくない、といっても無理なようにね。生きれば、その先は死なんだけれども、やっぱり生きていくんだ。そうして向上しながら滅びていくわけだね。」

と書いて「向上しながら滅びる一の章」を終わりにし、次の「一歩後退、二歩前進一の章」に続く。

「一歩後退、二歩前進一の章」では、まずストリップの歴史が紹介される。ストリップがただ過激さを求めて突き進んだが為に、行きつくところまで行って、やる事がなくなって終わってしまったことが書かれている。色川氏は、これは進歩発達が原因して滅びに至る典型的な図式、ワンサイクルで終わってしまう例だと説明する。

そして、次は映画を例に出す。映画はストリップと比べてその歴史が長い。その秘訣というのは映画が時々、素朴な原点に近いところに後戻りすることにある、と色川氏は説明する。そして、この両者の違いを人類や文明というものに適用する。

また引用しよう。

「ただ前に突っ走るだけではワンサイクルですぐに終わってしまう。自然の知恵というものはよくしたもので、前進のエネルギーとともに、たえず後退することもやっているんだね。それでなんとかサイクルをひきのばす。つまり、しのいでいるわけだ。」

もうひとつ引用しよう。

「とにかく、ワンサイクルで終わったんでは駄目なんだな。物事というものは自然のエネルギーにまかせると、あつというまに終わっちゃうものなんだ。そこをなんとか、だましだまし、ひきのばしていかなきゃならない。

人間なんて、もう衰退期に入っている生き物だから、進歩だけを考えたらあつというまに破滅だよ。

調子に乗って、十五戦全勝なんて、狙っちゃ駄目だ。破滅をひきよせているようなものさ。九勝六敗どころか、現状では、七勝八敗くらいを目標にしてちょうどいいかもしれないね。」

とまあ、これだけ引用すれば、色川氏の主張は分かっていただけだと思う。でね、僕の中では色川氏のこの主張と猪子氏の「官僚はバカでいい。優秀だとシステムが回りすぎちゃうから」発言が見事に繋がったのである。

そして、こんな風に色川氏と猪子氏の発言が繋がったおかげで、この猪子発言が僕の中で引っかかっていた理由が分かった気がする。猪子氏はWeb系のベンチャー企業の代表取締役、つまり、僕のイメージの中では進歩の権化みたいなポジションにいる人間なのである。僕はきっと、そんなバックボーンの間人間がこのような発言をすることに本能的に違和感を覚えたのである。だからこそ引っかかっていたのである。

そして僕は思うのである。進歩の真っ只中にいてこんな風に考えることが出来る猪子さんって、何てすごい人なんだろう、と。



## 「オパーリン一ヶ月（日記より）」

---

### 「オパーリン一ヶ月（日記より）」

オパーリン国王の動静。これを読めば王国全体で何が起こったのか、分かるでしょう。

#### □2012年5月

- ・ 3日  
つくばの自宅に東町健太氏を招いて、文学フリマに向けて製本作業。
- ・ 6日  
第十四回文学フリマ参加。全く売れずに悲惨だった。終了後父親からの電話でつくばに竜巻があったことを知り、焦る。結果としては我が家は無事であった。
- ・ 8日  
河出書房新社1次面接。通過。
- ・ 13日  
毎日新聞社筆記試験。まさかの通過。
- ・ 16日  
河出書房新社2時面接。通過。
- ・ 20日  
東町健太氏と「昆虫食のひるべ」に参加。詳細は「ルポ」に記載。
- ・ 21日  
毎日新聞社1次面接。面接官2人であったが、片本の面接官が巨漢で、芝浦と場に見学に行ったことを話すと「どうだった？気持ち悪かった？」とニヤニヤしながら聞いてきた。落選！
- ・ 24日  
河出書房新社3時面接。落選！ショックで臥せる。マスコミへの就職を断念。
- ・ 26日  
東町健太氏と「ゆるカフェ」に参加。詳細は「ルポ」に記載。イベント終了後、大学の友人と飲む為につくばへ帰る。

#### □2012年6月

- ・ 1日  
小学校の頃、一緒に日能研に通っていた友達と久しぶりに会って飲んだ。立派にまともに成長して、と同じ年の僕が言うのはおかしいのかもしれないが、そう思った。僕は変な方に振れてしまって、ずいぶん遠くに来たもんだなあ、と思った。色々と考えさせられた一日であった。
- ・ 2日  
日雇い派遣の仕事をしていた頃に知り合った人に依頼され、エアコンの取り付け工事を手伝った。疲れたけども、機械をイジったりとかって楽しい。
- ・ 3日  
友人のS君と共にパチンコに行った。8500円勝った。今まで、2、3000円を一瞬ですられた事はあったけれど、勝ったのは人生初めて。やばい、快感だぞ。ハマらない様に気をつけよう。
- ・ 4日  
久しぶりに研究室に行った。
- ・ 7日  
先述のエアコン取り付けの人とパチンコへ。12000円勝つ。
- ・ 8日  
図に乗って再びパチンコへ。なんとまた8000円勝つ。

・ 9日

ギャンブルで勝ったあぶく銭を持っていることが怖くなり、ニンテンドー3DSと「テリーのワンダーランド3DS」を購入。が、はまってしまい、デスタムーアを作ってしまった。そのせいで月オパの執筆が遅れる。最悪。が、とにかくパチンコは封印。

・ 15日

研究室へ。知り合いの人に「パチンコ辞めちゃったの？」と言われ、ムクムクと生きたい気持ちが出てきて、封印の決意があっさり崩れる。パチンコへ。が、悪運尽き、15000円負ける。もう二度と行かない。そう硬く決意した。

・ 16日

我が愛車、マツダのMPVを廃車に。思えば、この車で北海道に行ったり、色々車中泊したり、後ろの窓ガラスが全壊したり、思い出深い。最後の最後に前輪パンクしたところもこいつらしい。今までありがとう。

## 「読了リスト、感想文」(本)

---

### 「読了リスト、感想文」

このコーナーでは僕がその月に読んだ本や、見た映画等の簡単な感想を書いています。

- 本 -

・北杜夫

『父っちゃんは大変人』

「おれ」という一人称の語り手が、父親である「父っちゃん」について語る形式の小説。父っちゃんは怠け者で、そのせいで貧乏だったのだが、実は大金持ちの一族であり、父っちゃんの兄が死んだことで1兆円の遺産が転がり込み、一家は一夜にして富豪になる。

凶に乗って豪遊する父っちゃんであったが、税金を取られ激怒、王国を作り独立を宣言！というお話。

あれ、なんか少し似ている話を聞いたことがあるような気がする、そう思ったあなたは本誌をしっかりと読んでいる優秀な読者ですな。そうです、オパーリン王国の王国構想は北杜夫先生のマンボウ・マブセ共和国にインスピレーションを受けて始動したのです。

終始爆笑しっぱなしの名作でした。北先生、素晴らしい小説をありがとう。

・東良美季

『東京ノアール 消えた男優太賀麻郎の告白』

80年代初頭、AV黎明期にAVを創り上げていった人物の代表格として、真っ先に代々木忠監督や村西とおる監督の名前が挙げられることに異論は無いだろう。その時期、男優として業界を席卷したのが伝説の男優「太賀麻郎」であった(そうだ)。僕はリアルタイムでその時代を体験したわけではないから、文献によってその時代の様子を窺い知る他ない。だから、「そうだ」としか言えない。とても残念であるが仕方がない。

本書はAV全盛期の後、彼とその周辺の間人が如何に生きてきたのか、それが書かれた小説である。レーベルの大企業化、ビデオからDVDへの移行、そしてネットへ。2012年現在、AV業界は殆ど虫の息と断言していいほどの状況にあるらしい。そんな中、竿一本、あくまで「個」たろうと足掻く男の「生き様」、惚れるわ。

・高橋源一郎

『恋する原発』

今世紀最高の傑作と言いたい。と言うよりも何よりも、僕が書きたかったことを全て書かれてしまった感がある。

東日本大震災後、しがたないAV監督がチャリティーAVを作ろうと奮闘する小説。この小説のポイントは、小説内の出来事・人物が、殆ど全てと言っていいくらい、実際のAVの歴史のパロディーというかオマージュと言うか、つまりは元ネタがあるということである。チャリティーAVというのはナチュラルハイの『裸の大陸』というAVの事件が元になっているんだろうし、主要人物は安達かおるやバクシーシ山下とかV&Rプランニングの面々を想起させるし、後半には実際に実名でそういったAV監督達が登場するし、オリエント工業のダッチワイフも登場するし、ラストは何百人かで同時セックスというシーンなんだが、これはSODに実際にそういうAVがあるしね。

この小説の持つ本来の価値を理解するためには、読む前に相当量のAVの勉強が必要なんじゃないかと思う。文芸評論家とかちゃんと評論できるのかな、と思っちゃう。

一応(僕の中では立派に)震災後文学だから、学校教育の現場とかで、課題図書とかになれば面白いのにな。PTAからむっちゃ抗議来てさ。まあ、ないな。

・ホーキング青山

『差別をしよう!』

P26に詳しく書いた。

・鳥賀陽弘道

『「朝日」ともあろうものが。』

元朝日新聞記者である筆者が、朝日新聞内部の腐敗を暴露した本。タクシー券の私的流用から記事の捏造まで、この本に書かれていることが真実であるとしたら、マジで終わってる。非常に衝撃的な本。

・山本祐司

『毎日新聞社会部』

毎日新聞社会部のデスクだった著者が「毎日社会部はバンカラだったんだ。権力に猛然と立ち向かい、そのせいで何度も潰されそうになり、それでも頑張ったんだ！」と、当時の舞台裏を語った本。まあ面白かったけど、とにかく長い。

・唐十郎

『佐川君からの手紙』

作者とパリ人肉事件の犯人・佐川一政氏との交流を書いた小説。パリ人肉事件というのは、1981年、留学生だった日本人、佐川一政氏がフランス人女性を銃殺して、死後後にその肉を食べちゃったという事件。で、何か精神鑑定によって無罪になって、佐川一政氏は日本に帰ってきちゃう。日本で彼を死刑にしようとしたんだけど、フランス側が「もうこっちでは無罪だったから」と証拠や資料を渡してくれなくて、結局無罪。

その後、小説を書いたりテレビに出たりして有名人になるんだけど、やがて仕事も無くなり、就職できなかったために生活に困ることに。そのせいか、男優としてAVに出演したこともあったそうだ。その顛末は村西とおる監督の『村西とおるのコワ〜イAV撮影現場の話』にも書いてある。

その他にも、森達也氏がドキュメンタリー映画を撮ろうとして結局ダメだった話が『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』に書いてある。特殊漫画家の根本敬も佐川君と友達になっただけ、と枚挙にいとまがない。

とまあ、やっぱりみんな気になるんだよね。お腹が空いているわけでもないだろうに、人の肉を食べたいと思う、そして実行するその心理、どんなものなんだろう、と。

小説自体は別に面白くは無かった。でも「佐川君」が出ていたから、それだけで十分、面白かった。

・田中小実昌

『上陸』

戦時中・終戦直後の日本の風景を僕は知らない。僕に限らず、それを知っている人はどんどんあの世に逝ってしまって、今はもう殆どいない。後10年したら、と想像する。そしたら、もう本を読むしかない。

世間的に田中小実昌氏がどのようにカテゴライズされているかは知らないが、僕の中では（そしておそらくは世の中にも）彼は「闇市・焼け跡派」の作家である。僕の中で色川武大氏とか、野坂昭如氏とかと同じ箱に入っている。彼らは「安易な反戦」とか「軍国主義教育への嫌悪」とか、そういう言ってしまうと「お決まり」のことは書かない。

田中小実昌氏の小説には、ただ彼の見た風景・光景が書かれている様に思う。戦時中に中国にいたときのこと、戦後、米軍基地で働いたときのこと、などなど。

なんか、理由は上手く説明できないんだけど、今僕達を読むべきものって、彼らの作品なんじゃないのかな、って思う。「さあ、学ぼう！」とか「これを読んで、これからのあるべき日本の姿を模索しよう！」とか、そういう肩肘張った感じじゃなくてさ。

・濡木痴夢男

『奇譚クラブとその周辺』

団鬼六先生とかを輩出した伝説のSM雑誌「奇譚クラブ」。その編集の裏側や、警察の取り締まりや悪書追放キャンペーンとの戦いの様子が書かれている本。

ゲイカルチャーを支えた雑誌「薔薇族」について、同誌の編集長であった伊藤文学氏が書いた本『「薔薇族」編集長』を少し前に読んだのだけれども、両者で共通する点が多かった様に思う。「性的マイノリティー」と「非寛容な社会」

という図式である。どちらも、そのマイノリティーを支える雑誌を編集していた人間が書いた、戦いの記録なのである。

僕なんか「表現の自由」とか「思想・信条の自由」なんて言うと薄っぺらくしかならないんだけど、こうやって戦ってきた先達の血の滲む様な努力の末に、今僕達がそれを享受しているという事実は本当にでかいと思う。だからこそ、その歴史、決して表舞台の歴史には刻まれないであろうその歴史を記したこれらの書物は本当に貴重な資料であると思う。奇も銜いも無く、誰しものが知っておくべきだと思う。

## 「読了リスト、感想文」（パブー）

---

### - パブー -

・Grasshouse

『「終末」の終わり、「ルネッサンス」の始まり』

エッセイ。『THRIVE』という映画と武者小路実篤の「新しき村」の共通点、そしてその「循環」という方向性が、現在どん詰まりの世界がこれから目を向ける方向なのではないかと論じている。この文章で論じられている世界が実現すれば、と僕も思う。さーて、自分には何が出来るか、と考え出すと気が重い。でも、何かしなくてはな。

『インキュナブラ I』

幻想短編集。ある同人誌の編集部に謎の原稿が送られてきて、それをGrasshouse氏がネットの海に転載している、という設定の小説。同人内のやりとりが面白かった。筒井康隆の『大いなる助走』を思い出した。

で、その謎の原稿として収録されている『干し首』、アフリカの少数民族の神秘を知ろうとする探検家ジョナサン・シルバースタインの話。ちょうど、渋澤龍彦の『秘密結社の手帖』を読んでいる途中だったので、グノーシス派とか薔薇十字とか覚えただけの単語が沢山出てきて楽しかった。

『二階のつきあたりの部屋』

社会に絶望して狂ってしまった兄が家の二階を占拠してインコを大量に飼い、インコの国を作ってしまう。そのせいで妹である「わたし」と両親、つまり家族は崩壊してってしまう、という話。基本的に狂っている人の話が好きなので、とても楽しかった。兄の狂い方が完璧なのは言うまでもなく、ヒステリーな母の狂い方もいいし、無関心な父の狂い方もいい。主人公の目線から見た家族の狂い方がとても良かった。

## 「読了リスト、感想文」（映画）

### - 映画 -

#### ・『ファニーゲーム』

ミヒヤエル・ハネケ監督。最も気が滅入る映画という下馬評であったが、確かにエグかったが最も言うほどではなかった。そして、この映画には気が滅入るかどうかという点以上に大事な要素が入っていて、その要素の表現の仕方が絶妙で、とても面白い映画だと思った。

その要素を説明するためにまず、映画のあらすじを説明しよう。もちろんネタバレしてしまうので、まだ見ていない方はこの文章自体を読み飛ばして欲しい。

はい、一応警告しといたので、あらすじを書き始めましょうか。上品な、おそらくは平均よりもだいぶ裕福な外人の三大家族、父、母、息子、が車に乗っているシーンから映画は始まる。とても幸せそうだ。突然、バックミュージックにデスメタルが鳴り響く、画は幸せそうなまま、その対比がもう不気味だ。

どこかに到着する。レイクサイドの、おそらくは別荘？夏休みかなんかで遊びに来たのだろう。母親は携帯で友人とくっちゃべりながら夕食の準備、父と息子はヨットの整備をする。

夕飯の準備をしていた母、トントンと玄関の扉がノックされる。戸を開けると小デブなコミュ障っぽい男が「隣の〇〇さんのお使いで来ました、卵を分けてください」と言う。母は快く分けてあげる。お礼を言って帰ろうとするコミュ障、が彼はドジッ子なのか玄関で貰ったばかりの卵を割ってしまう。母はうわっ、やらかした、と思いつつもまだ顔は笑顔で割れた卵を片付けて、新しいのをくれてやることに。オズオズと貰いに台所に戻るコミュ障。

そして、新しい卵を受け取る。が、受け取ったその矢先、母の携帯を水の入ったボウルに落とし、水没させてしまう。平謝りするコミュ障、イラつき「とにかくもう帰れ」と言う母。出て行くコミュ障。

と、ここで気さくなアラブ人？っぽい奴が登場。ズケズケと押し入ってきて父のゴルフクラブを勝手に手に取り「是非試し打ちさせてくれ」と言い出す。母、仕方なく承諾。クラブを持って出て行くアラブ人。

と、コミュ障がまた戻ってきた。（この家族が飼っている）犬に襲われて、また卵を駄目にしたらしい。もうほぼマジギレの母「もう卵はありません」という。と、何とコミュ障、「いや、まだ残っていた。俺は見た。」と厚かましくも要求。故意ではないとはいえ、厚かましすぎる。当然、母は「は？ふざけんな。」とマジギレ。

そこにアラブ人帰還、「いやー、素晴らしいクラブでしたよ」とペラペラまくし立てる。奥さん遂にマジギレ。「お前ら、もうとにかく帰れ。」

そこに旦那と息子が帰還。マジギレする家内と、二人の訳分からん男。状況の飲み込めない旦那に奥さんは「とにかくこいつらを追い返してくれ。」とヒステリーに告げて、部屋に籠ってしまう。

旦那は戸惑いながらも二人に「どうしたんです？」と丁寧に尋ねる。コミュ障「とにかく俺は悪くない、卵をくれないあいつが悪い。」アラブ「そうだよ、卵くらいでケチケチしやがって、カスが。」と豹変し、奥さんを悪し様に言う。こいつら、ヤバイ、と判断した旦那は「帰れ」。アラブ、思いつきりむかつくニヘラ顔で「俺らなんも悪くないのになんでこんな扱い受けなきゃなれないわけ？訳わかんない。卵くれるまで帰らないよ。」と挑発。

親父も遂にマジギレ。とっさにアラブ人を引っ叩いてしまう。次の瞬間、アラブ人は持っていたゴルフクラブで旦那の足を殴打。旦那の足は見事に骨折。

以降、悲惨なファニーゲーム、つまりはキチガイ二人による家族への暴行が繰り返され、結局、三人ともじっくりといたぶられ、ぶっ殺される。

と、以上がこの悲惨な映画のあらすじであるが、この映画で最も重要なポイント、シーンは親父の平手打ちである。この映画の主題はもちろん「暴力」なのであるが、このシーンによって単純な「暴力=悪」の図式では片付けることが出来ない映画になっている。

つまり、暴力=悪と設定した場合、この二人は悪くない、もしくはこの家族が悪い、という物凄いジレンマが発生するように出来ているのである。

だって、先に暴力を振ったのは親父なのだから。キチガイ二人は正当防衛をしたに過ぎない。でも、それじゃあ、どうしてもスッキリできないよね。そこで、親父の平手打ちなんて「大したことじゃない」とするとしよう。すると、これは

暴力の肯定である。そしたら、キチガイの暴力も同じ「暴力」である以上「大したことじゃない」ことになってしまう。

そう、理詰めで考えようとする、どうしてもこの二人だけが悪いことにはできないのである。しかし、理屈を放棄して、「とにかくこいつらは許せない」と言ってしまったとき、それは僕達人間が、理知的な存在である「人間」であろうとする姿勢そのものを放棄することになるのである。

だからこそ、この映画は見ていて苦しい。僕が人間であろうとすればするほど、この二人を「悪」と断定することはできなくなるのである。

で、この監督、この映画をそのまま俳優だけ変えてハリウッドリメイクしたらいい。アメリカ人がこの映画を見るって想像するとすごく面白いよね。古くは太平洋戦争から、アフガニスタン・イラク戦争まで。自分達がしてきたことと、このキチガイ二人組みの行動を重ね合わせて苦しんだりするのだろうか。もし苦しめるなら、その人はまともだと思ふ。何も思わないアメリカ人がいたら、まさにそいつこそが、監督が描き出したキチガイそのものだろう。

#### ・『恋の罪』

園子温監督。東電OL殺人事件をモチーフにした映画だと聞いていたのだが、東電もOLも出てこなかった（笑）。まあ、何の問題も無いのだが。そういえば、この事件で犯人扱いされてたゴビンダさんの免罪が確定したね。

登場人物達の狂い方が半端ない。というよりメインキャラは殆ど全員狂っている。唯一、水野美紀演じる女警察官だけが不倫という秘密を抱えているだけに止まっている。その不倫相手役のアンジャッシュの児島、中々に演技がいい。面白くないし（あのつまらない感じが僕は好きだが）芸人辞めて俳優になっちゃえばいいのに。

という風にみんな狂っているのだが、中でも一番狂っていたのは教授兼娼婦の美津子の母親である。このばあちゃんの狂い方がダントツの最強であった。あとは「魔女っ子倶楽部」の店長もいい味出してたな。爆笑しながらピンクの蛍光塗料を入れた水風船をひたすらに投げつけまくるっていうね。

いい映画だった。

#### ・『ファイナル・ジャッジメント』

幸福の科学のエルカンターレが監督・総指揮した実写映画。そして今回はその息子が「企画」という形でクレジットされている。なんかジブリと重なる。

ものの見事にプロパガンダ映画だった。そして、アツパレと言いたくなるほどのクソ映画。終始笑いを抑えるのに必死であった。感動して泣いているフリをしてごまかした。

そして、金がかかっているから、いちいち映像のクオリティーが高くてウザイ。CGとか、そこらの特撮よりもすごかったもんな。まあ、ヒドイヒドイ言っている、どうヒドイのかを説明しないとな。まずは設定がとても粗い。なんか共産主義的な帝国が日本を乗っ取って宗教を弾圧するみたいな筋書きなんだけど、ほんとにちゃっちゃいイメージだけの巨大帝国で、巨大帝国の癖に主人公を追い回すのにジープ一台ってさ、最初の方に戦車とかヘリとか色々出てきたじゃん。あとさ、主人公とその親友は政権与党（民主党をイメージしている）の創始者である二人の政治家の息子っていう設定なんけども、政治家の息子が消防団員なわけないでしょ。主人公は何やっていた人なのか最後までわかんなかったし。それと、宗教的な場面が他の宗教をパクリ過ぎていて笑える。車椅子の女の子（他の女優はみんな不細工なんだけども、何故かこの子だけめっちゃ可愛い。惜しい、両親が宗教さえ信じなければ普通に女優になれただろうに。）が主人公による「奇跡」で立てるようになったり、主人公が森で瞑想したら悪魔が寄ってきて、その誘惑に打ち勝って主人公が「悪魔よ、立ち去れ！」って言うところとか、宗教信じている人が食事の時にしているお祈りとか、全部キリスト教のパクリじゃん！

で、結局は宗教最強みたいな感じで平和が訪れるんだけどもさ、もう滅茶苦茶だよな全てが。今年度ラジー章の最有力候補だと思う。

#### ・『LAマザーファッカーズ』

あの鬼畜映画『ムカデ人間』の先頭役を演じた北村昭博が監督・主演した映画。予想通り、いい感じに狂ってました

以下、あらすじ。「アキ」という日本人の主人公がアメリカで暮らしてるんだけど、彼女（アメリカ人）とか友達と、ちょっと離れた友人、コンスタンティンの家に遊びに行く。



アキは二年前にコンビニでコンスタンティンが韓国人の女を殴っていて面白かったので友達になったのだが、彼が何者なのか詳しくは知らない。コンスタンティンは見た目からして変体丸出しのやばいやつで、アキの彼女とその女友達は不信感丸出し。が、アキと男友達（やたらうるさい日本人、いつもラリっている陽気なクロアチア人、アキのクラスメイトの根暗なアメリカ人）はそのヤバさに全く気づかない。

夕食後、アキの彼女と女友達がドン引きしている最中、黒人の友達から電話がかかってきて、「クラブに遊びに行こう」と誘われる。アキとうるさい日本人とラリってるクロアチア人は遊びに行く。

と、これ以上言うとネタバレになっちゃうからな。感想でも書くかな。一言で言えば不条理極まりない映画。観客を置き去りにしっぱなしである。しかし、そのぶっ飛び方は意図的である。話の筋とか、そういう細かいことを気にしているとモヤモヤする。いや、モヤモヤしないレベルでぶっ飛んでいる。そのぶっ飛び方がステキ。さすがはムカデ人間の先頭の人である。そして何故か見終わると感動する。いい映画だった。

## 「読了リスト、感想文」 (AV)

### - AV -

#### ・「ギャルの素顔～カリスマモデルはすっぴん天使」 彩花ゆめ

バクシーシ山下監督。「AV難民」というレーベルから2009年7月19日に発売された作品。この「AV難民」というレーベルは、バクシーシ山下、平野勝之、ゴールドマンという、90年代にAV全盛期を席卷した三人の伝説的なカリスマ監督が再集結した奇跡のようなレーベルなのであった。しかし、速攻で資金難に陥ったためか、殆ど作品をリリースすることも無く消えてしまった。個人的には実に惜しいと思うのだが、僕が嗅いたところで何にもならないので仕方が無い。

だが、一瞬にせよ作品を残してくれたことはバクシーシ山下愛好家である僕としては実にありがたいこともまた確かである。2009年という、バクシーシ作品の中では比較的最近の作品であり、非常に貴重な資料である。

作品の内容としては、エグいシーンとかも無いし、普通の人でも平気で見れると思う。ではバクシーシらしさも無くなってしまっているのか、というと全然そんなことは無い、鬼才依然健在である。

しょうもないギャル女優の自宅でハメ撮りするという内容なのだが、女優が途中でアソコが痛いと言ってゴネだしたり、プレイ中に寝たり、鼻屑にしているギャル男(?)のイベントがあるとかいうことで撮影を中止して渋谷に行ったり、もうメチャクチャである。普通のAVをとる気が全くない、最高である。

で、この作品の面白いところは、このギャル女優が実は結構素直でいい娘であるということである。で、それを撮っているバクシーシ氏も、(数々のトラブルにもかかわらず)何だか結構楽しそうなのである。

で、タイトルにもある通り、自宅での撮影中、彼女はギャルメイクを落として「すっぴん」になる。このすっぴんがケバいメイクをしているときよりも断然可愛いのである。で、彼女は撮影中にすっぴんになるのは初めてだと言う。

実はこの点が結構重要なポイントで、この作品が秀逸なドキュメンタリーとなっている所以でもある。彼女は「ギャル女優」であるから、普段の撮影では「ギャル」という商品として作品化され、消費される。それは普通のAV作成側からすれば至極当然のことなのである。AVを見る男達は誰も「ギャル」である前に一人の「人間」である彼女には興味がないのだから。

しかし、バクシーシ山下氏は、メイクを落としたすっぴんの彼女を撮る。マンコが痛いとかゴネ、プレイ中に眠る、我侭で責任感のかけらもなく、でもその分奔放で素直で可愛い彼女を撮るのだ。

「女優のプライベートを撮る」という企画自体は別段珍しいものでもない、というよりもありふれているし、そこいら中に溢れ返っている。しかし、それらは大抵が目も当てられないほどに「ヒドい」代物である。ドキュメンタリー「タッチ」のAVでしかない。「タッチ」であるから、安易なイメージの作られた「素っぼさ」を演出しているに過ぎず、そこには女優の「素」なんてちっとも映っていない。ゴミである。

巷にゴミが蔓延るほど、この秀逸なドキュメンタリーは一人の人間を写す「作品」として輝きを増す。マンコが痛いとかゴネ、セックス中に寝てしまうからこそ、そしておまけにバクシーシ氏が中タイけず、途中で疲れてしまうからこそ、この作品は素晴らしいのだ。そこには人間がいるのだ。バカな女としみわたれた中年男、人間が二人も移っているAVなんて、いやAVに限らず映画にだって、滅多にあるもんじゃない。

#### ・「あの合気道で痴漢を撃退した女！出演！！」夏海純

バクシーシ山下監督。レーベル「AV難民」から2009年6月19日発売。

これまた、AV難民から出された貴重なバクシーシ山下監督作品の一つである。どうやら、バクシーシ氏がAV難民かた発表した作品は、先に紹介した「ギャルの素顔～カリスマモデルはすっぴん天使」と本作の2作だけのようなのである。

これは、バクシーシ山下研究家の僕が言うのは忍びないのだが、普通のAVである。しかし、それはバクシーシ監督の意向とは別の形でそうならざるおへなかったのではないかと思われる。以後そう推測される理由を書いていく。

まず第一に女優の問題がある。プロ意識なのか、本来がそういう性格なのか分からないが、この女優が「AV女優」として作り込まれてしまっているのである。女優が彼女の中での勝手な「AV女優らしさ」を演じてしまっているの

ある。男からしたら（少なくとも僕からしたら）そんな見え透いた作り物なんて白々しいだけなのに、彼女のような変にプロ意識を持ってしまっているような女優には、そこら辺の所には想像が及ばないらしい。バクシーシ氏も自身の著作の中でこの手の「女優」を批判している。

第二に、この女優の出自である。出自といっても彼女個人の生い立ちではなく、女優としての経歴である。この当時、彼女はソフトオンデマンド系列のサディスティックヴィレッジというレーベルからデビューしており、デビュー間もないようである。この作品の中でもサディスティックヴィレッジ出演作の映像が引用されている。これが何を意味するのか？あくまで憶測だが、ソフトオンデマンドという大資本の意向が働いているのではないかと僕は思うのだ。だって、バクシーシ氏が勝手に作ったら、こんな作品になるはずがないのだから。

上記の二点の理由から、非常に残念なことにこの作品は「AVらしい」AVになってしまっている。つまり、バクシーシ氏の良さが殺されてしまっているのだ。しかし、タダで引き下がるバクシーシ氏ではない。イタチの最後っ屁がごとく、彼らしさを盛り込んでいるパートが二つある。

一つは、電車のセットで痴漢を再現するというシーン。「実際に痴漢をしている人達」という設定で男優数人が女優に痴漢をする。その男優の中に一人、痴漢の先生みたいなのがいて、残りの男優達に逐一痴漢の方法を指導しているのだが、この様子が面白い。その指導が一つ細かくて、しかも全然納得できない。そのナンセンスさ加減が笑える。

もう一つは、女優の所属プロダクションの女子寮で撮影するというパートである。それまでもチョコチョコ画面に映っていた（つまりはバクシーシ氏は伏線を張っていたことになるのだが）女優のマネージャー（小太りのオッサン、バクシーシ氏の好みそうな被写体）が突如して映像の主役に躍り出るのである！小太りのマネージャーが「彼女は脚がステキだから、それが生きるように撮った方がいい、足コキとか。ちょっとやってみましょうか？」的なことを言って床に寝転がりだすのだ。

この場面になった瞬間、僕は小躍りした。これを待っていたのだ。心なしか、バクシーシ氏の声も弾んでいるように思う。画面もイキイキとしてきた。もちろん、一番イキイキとしているのは小太りの親父・マネージャーである。勝手に脱ぎだす。女優は戸惑いながらも足コキを開始。小太りは喘ぎだす。悦楽至福の表情である。もちろん、画は最高に汚い。これでこそバクシーシ山下である。

最後に、本作のパッケージ背面にバクシーシ監督からのメッセージが書かれていたのでそれを引用する。

「なぜここで彼女はセックスしているのか。カメラの前でマンコを見せる女の子は、例外なく饒舌に自分を正直に語ってくれる。派手さはないけれど、そんな小さな事実を記録していくことで、目の前でセックスしている彼女が浮き彫りになる。それはお節介な妄想よりもオナニーに確実に直結する。そう信じています。ーバクシーシ山下」

## 「読了リスト、感想文」（漫画）

---

### - 漫画 -

・蛭子能収

『明るい映画館』

短編集。恵比寿さんの漫画を読むのはこれが初めてだったんだけど、蛭子らしさがどういうものなのかというのは大体掴んだと思う。よくテレビとかで蛭子さんの漫画を紹介するのに「へたうま」とか言うけど、あれは違うね。下手な漫画家とかは他にもいっぱいいるしさ。

蛭子らしさはやはりその漫画の内容にあると思う。内容というかストーリーが「無い」のである。登場人物とかはいる、台詞もある、でもストーリーは無いのである。

それはどういうことかという、蛭子さんの漫画には、伝えたいこととか作者の意図とかそういうものが無いのである。きっと、蛭子さんはマジで何にも考えずに漫画を書いているんだと思う。もちろん、読者を楽しませようとかいう娯楽性とかも全く無い。

僕の説明では分かりにくいかもしれないが、実際説明のしようがないのである。作品の説明をしても無駄だと思う。でもやってみるか。例えば、「伊豆の踊り子」という作品はヤクザ風の男と全裸の女のカップルがもう一組のカップルと乱交パーティーをして笑いものになるという話である。それ以上でも以下でもない。「不条理」という一言ではまとめたくないのだが、やはりそれしか言いようが無いのだ。

「おもしろいか」と聞かれれば「もう二度と買いたくない」と答えるが、「つまらないか」と聞かれれば「つまらなくすらない。いや、そもそも、おもしろいとかつまらないってそんなに重要なことなのか」と答えてしまうような、そんな漫画であった。

しかし、まだ一冊目である。蛭子さんの世界観について語るにはまだ早いかもしれない。次は初期の代表的なのを読んでみたい。

## 「執筆者略歴」

---

### 「執筆者略歴」

本誌執筆陣のプロフィール。

#### ・オパーリン

1988年生（24歳）。大学二年生の時、女にふられてばかりの学生生活に嫌気がさし、自分に都合のいいことしか起きない国を作りたいと思う様になり「王国計画」を構想。勝手に「オパーリン王国」を建国し独立。本誌『月刊オパーリン王国』も「王国構想」の一環である。

また、アマチュア小説家としても活動しており、過去3度「筑波学生文芸賞」に作品を投稿するも全て落選。「世の中が俺に追い付いていない」と負け惜しむ日々を送っている。

過去の作品は電子書籍サイト「パプー」で電子化されており、無料で読むことが出来る。代表作は『存在と記憶の距離感』、『夢風船の君、現実のママン』、『灰色ネオン』等。

#### ・東町健太

たぶん1987年生まれ（25歳）。僕（以降、オパ）が4月生まれであるのに対して、彼は3月生まれなので学年は2つ上である。オパが記事に添えてプロフィールを書いてくれと頼んだところ「お前が適当に書いといてくれ」と断られたので、オパが知りうる限りの事を書いていきます。

大学（文学部？）を中退後、ブラックな印刷会社で働くなど、身体を張った「文学」を行っている。

オパとはかれこれ3、4年の付き合いになるだろうか。オパに文学と風俗のイロハを教える。オパが東京に帰省する度に会い、一緒に東京の町を散策する。

現在は週刊漫画を印刷している工場で単調かつ過酷な労働を強いられている。本人いわく「脳が溶ける」そうだ。最近では昇進し、色々やる様になってきたそうです。

現在、月オパで書いたエッセイをまとめた第一エッセイ集『バカが吼える！』がパプーのオパーリンのオパーリンのページにて公開されている。

#### ・弦楽器イルカ

よく知らない人。気づいたら記事が掲載されていた。とりあえず隅っこに寄せて、少し泳がせてみることにする。

#### ・戸田環紀

1976年4月4日生まれ。緑色の車に乗ったジプシーの一人。パプーに『水曜日のスーパーマーケットに行っはいけない』『ミツコという女』『海月』などを掲載中。好きな言葉は「俺は迷っているわけじゃない」と「……コーヒーならできてるから、飲みたきゃ勝手に飲んでけよ」。

#### ・Grasshouse

草原克芳。生没年不詳。広告代理店、制作プロダクション、通販会社に、コピーライターとして勤務。文芸同人誌『カプリチオ』編集発行。パプー発表作品『プラハの人形遣い』『アスペラトゥス雲』『庭師と四人の女たち』『人間ポンプの女』『下北沢路地裏ツアー』。評論『地下生活者としての夏目漱石』など。大学時代にマルケス、ボルヘス、ギュンター・グラスを読んで、魔術的リアリズムを模倣した下手な小説を書きまくり、人生を棒に振ったオッチョコチョイ。

## 「編集後記」

---

### 「編集後記」

ふう、やっとお書き終わりました、っと。最後に書いたのはp26からの論評「「差別」このややこしき言葉—ホーキング青山『差別をしよう!』から考える—」だ。我ながら結構良くかけたと思う。そして、普段は上手くいえない僕の根本姿勢みたいなものにも直結する文章になったんじゃないかと思う。「はばからない」ってこういうことだぞ、と(笑)

最近、本誌を読んでくれている友人から「何のためにかいているのかが分からない」とか「ルポは面白いが、それ以外は分からん」とかの声を頂くことが何度かあった。無視ほど辛いものはないから、ありがたいことである。そして、その時はなかなか上手く説明できなかったのだが、今なら、暫定的な答えではあるが、言えそうな気がする。

僕は何のために書いているのか、それはきっと、「響きを買ひ、人を不快にし、差別されるためだ」と。そう、僕はバクシーシ山下さんに憧れ、根本敬さんに憧れ、彼らみたいに生きたいんだと思う。

答えになっているだろうか? 納得できなかったら、また会った時に問い詰めてくれれば嬉しい。

では、また会いましょう。

(2012年6月16日)

※「月刊 オパーリン王国」では「はばからない」をコンセプトに、「何か、何でもいいから、とにかく主張したいんだ」という方に対して紙面を提供したいと考えています。少しでも思い当たる節のある方は是非、記事を投稿してください。送り先は、

[kuukiyomimasem0409@gmail.com](mailto:kuukiyomimasem0409@gmail.com)

まで。

本文、形式、筆名、簡単、筆者略歴を添えて送りください。お待ちしております。(国王 オパーリン)

※「月オパ」のバックナンバーは電子書籍サイト「パプー」で読むことができます。

<http://p.booklog.jp/users/opaarim>

—2012年5月2日発行—

編集・発行人 オパーリン

月刊オパーリン王国 2012年5・6月合併号

<http://p.booklog.jp/book/52238>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52238>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52238>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ